



ス ポ ー ツ

社会をあそぶ
ガイドブック

サッカーがつくる居心地の良い社会



● 目次 ●

はじめに 「自分らしさ」と「あそび」を大事にする社会	3
ガイドブックの目的と構成	4
〈第1部〉 当事者を「エンパワー」する	
02 ギャンブル依存症からの回復にスポーツが果たす役割 ● グレイス・ロード	9
03 自分らしく生きるためのインフラ創り ● リヴァトレ	
社会復帰後の居場所 — 1人きりにならないために — ● オムハビユナイテッド	12
まとめ 1: 社会復帰支援プログラムとスポーツ	15
〈第2部〉 「居場所」をつくる	
04 コートの中は共生社会の実験場 ● 日伯経済文化協会 (ANBEC)	17
05 フットサルチームをつくりたいわけではない ● FYO	20
06 やりたいことを生き生きとやるのが、自立への土台 ● 茗荷谷クラブ/FC 茗荷谷	23
まとめ 2: 自分らしさ + チャレンジ + 相互理解 = 居場所	26
〈第3部〉 大会を通じて「居場所」を広げる	
07 「コミュニケーション・ツール」としてのフットサル ● 千葉「共に暮らす」フットボール協会	28
08 「あきらめない姿勢」を大人が身をもって示す ● まきばフリースクール	31
09 「ホープフル」な居場所を広げる ● 野武士ジャパン	35
まとめ 3: 居場所を拡張する“晴れ舞台”	40
〈第4部〉 「社会全体」に働きかける	
10 精神障がい者フットボールのシンボルとして ● 日本ソーシャルフットボール協会	42
11 誰もが誰かのセーフティーネット ● daimon	45
まとめ 4: 社会を居心地よくする“花火”	49
対談: スポーツを通じた社会的包摂の可能性	51
おわりに スポーツで仲間はずれを生み出さない社会をつくる	54

はじめに

「自分らしさ」と「あそび」を大事にする社会

「明日のホームレスサッカーの練習、行きたかったんだけど仕事が入っていけないや。次の練習はみんなに会いに行くね。仕事は忙しくて大変。今度話聞いてよ! 笑」

この電話をくれた相手は、30歳の男性。
1年前まで、住所をもたずホームレス状態だった若者です。

決して裕福とはいえない家庭で育ち、障がいを抱えつつ住み込みで仕事をしていたものの、周りの仕事のスピードについていけず失業。帰る家がなく路上で生活をしていました。

路上での生活を振り返って聞いてみると
「頼れる人がいなくて本当に孤独だった。食べるものがなくて死んでしまう、寒さに凍えてしまうのでは、明日どんな生活しているか、未来のことは何も考えられなかったよ・・・」といえます。

そんな彼が、今では路上生活を脱し、警備の仕事毎日頑張っています。
彼が路上生活から抜け出し、今仕事を頑張っている要因の1つに「ホームレスサッカー」があります。

ホームレスサッカーは、ホームレスの人や市民と一緒にサッカーをする場です。
仕事に直結する場でも、生活や人生相談の場でもありません。むしろ「あそび」といえます。

でもそこは、一緒にボールを蹴る仲間がいて、日々のわたいたない雑談ができ「自分らしくいられる場」なのです。
時には、ボールを蹴った後に、みんなでご飯を食べながら、その日の練習のこと、これからの人生のこと、思い出を語り合ったりもします。

生きるために仕事をするのは、とても大切です。
でも、身体や健康や信頼できる仲間がいることもとても大切です。

『社会(スポーツ)をあそぶガイドブック』では、サッカーがうみだす、社会的不利・困難を抱える若者の変化を紹介しています。ホームレス、ギャンブル依存症、うつ病、ひきこもり、等・・・様々な現場でスポーツが用いられ、当事者だけでなくその周りの社会をも動かしつつあります。

- ・若者支援に携わる方には、自分の現場でも取り入れられることがあるのでは?
- ・サッカーやスポーツに携わる方には、スポーツには、勝ち負け以外の価値もあるのでは?

そんなことを感じ取ってもらえたらと思います。

過去や未来ではなく、「今」を大切に生きていく社会。
「自分らしさ」と「あそび」のある社会とは、どんな社会なのでしょう?
そのヒントがこのガイドブックにはつまっています。

ガイドブックを片手に、これからの社会のことを一緒に考えていきましょう!

長谷川知広
NPO 法人ビッグイシュー基金
ダイバーシティサッカー コーディネーター

ガイドブックの目的と構成

◆ ガイドブックの目的

ビッグイシュー基金では10年以上にわたってホームレスサッカーのプログラムを実施してきました。10年間で良いことも課題も様々ありました。良い面では、ホームレス当事者がサッカーのチームメイトとの出会いの場となっていることや、参加者の心身の健康の促進があります。一方で、勝ち負けにこだわる人とサッカーで人と交流すること自体を楽しむ人との間で乖離が生じるといった課題もありました。

今回のガイドブックでは、社会的不利・困難を抱える若者を応援する団体が「スポーツ」プログラムを取り入れられるよう情報をまとめています。

ガイドブックで紹介する団体は下記のように様々な背景をもった当事者に対してスポーツプログラムを実施しています。各団体ともに、スポーツの良さを活かす一方でスポーツが苦手な人得意な人もそうでない人も楽しめるよう「スポーツの新しいデザイン」に挑戦をしています。ガイドブックが用いられることで、居心地の良い社会が広がっていくことを願っています。

<参加者の背景>

- 在日ブラジル人の若者
- ギャンブル依存症
- うつや双極性障がい
- 精神障がい者
- 不登校やひきこもり
- 社会的養護の若者
- 社会的に孤立しがちな女性
- 発達障がいや学習障がい
- ホームレス

◆ ガイドブック作成まで

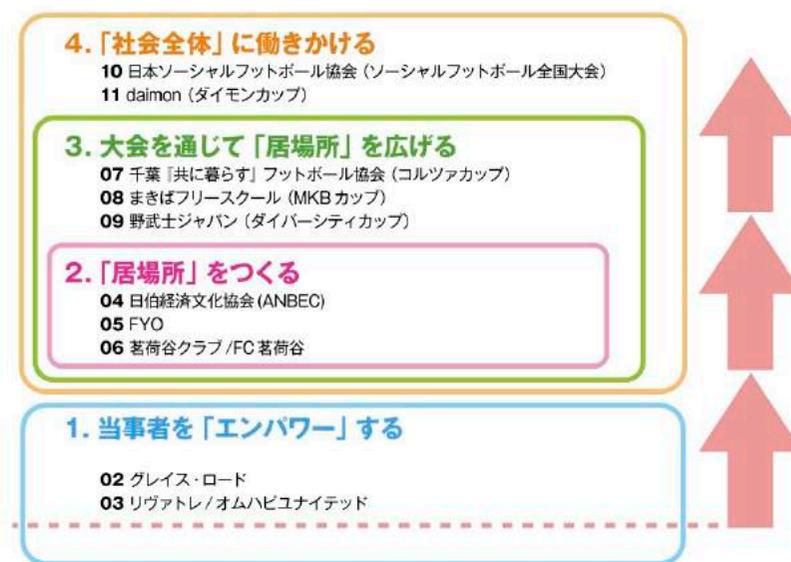
まず「社会的不利・困難を抱える若者に対してスポーツプログラムを実施している団体」を30ほどピックアップしました。ここからホームページや資料の調査を行い、実際に定期的なプログラムを実施している11団体(とその運営団体となった2団体)に絞り、各団体ごとに120分のインタビューを実施しました。

主な質問内容は以下のような構成になっています。

- ① 団体設立(スポーツ活動開始)の経緯
- ② どのような活動を、どのような体制で実施してきたのか
- ③ 活動があることでどのような変化が生まれたのか
- ④ 活動を継続していく上でのポイントと課題

インタビューの結果、社会的困難を抱えた若者支援のためのスポーツプログラムは、その意図や効果が実に様々であることがわかりました。ガイドブックでは、それらを下の図のように4つの段階に分けて説明しています。4つの段階は、1.個人のできることが増える効果(エンパワーメント)→2.個人が社会関係に接続する効果(「居場所」)→3.「居場所」を拡大する効果→4.社会全体に働きかける効果(セーフティネットとパートナーシップ)のように、徐々に影響が広がるように進行していきます。

本文は第1部から第4部へと順番に読んでいただくことで、その広がりを感じていただけるように構成しました。各段階の特徴をよく表している事例を2〜3つ個別に紹介し、その後「まとめ」をつけています。もちろん各団体には、それぞれに個別の魅力があります。それを特徴づける発言を、本文の小見出しにマーカーを引いて示しました。



第1部「当事者を「エンパワー」する」では、ギャンブルやうつ病などの精神疾患を抱えた人たちの社会復帰プログラムの中で、スポーツがどのような形で活用されているかを紹介します。第2部「居場所」をつくる」では、生きづらさを抱えた若者を支援する団体をとりあげます。若者たちがスポーツをきっかけに「自分がやりたいこと」にチャレンジする中で、成功や失敗をし、他者に認められ、自分や他者への理解を深めていく過程を描きます。第3部「大会を通じて「居場所」を広げる」では、自分の所属する団体やチームを一步越えてチャレンジの幅や出会いを広げるための場作りを扱います。それは自立生活を支えるコミュニティの広がりを確認できる場でもあります。第4部「社会全体に働きかける」では、大会が当事者にとって目指す目標「晴れ舞台」であると同時に、社会的な注目を集めることで社会的な課題を社会に発信する媒体(「花火」)でもあることを示します。

最初から順番に目を通すだけでなく、小見出しに興味をひかれた団体をピックアップして読むのもよいでしょう。先にまとめを読んでから、詳しく知りたくなった団体に戻ることもできるでしょう。友人のおすすめページを読むような気分で、読者みなさんがそれぞれの読み方で楽しんでください。

02 ギャンブル依存症からの回復に スポーツが果たす役割

グレイス・ロード

山梨県に所在するグレイス・ロードは、20代～50代の入所者が、共同生活で衣食住を共にしながらギャンブル依存症からの回復を目指す施設です。自助グループ（GA）への参加、清掃活動、調理実習、レクリエーション、多様な形のミーティングやボランティア活動など様々な回復プログラムを通じ、身体的・精神的・社会的援助を提供し、ギャンブル依存症からの回復と社会復帰を支援しています。

◆ ギャンブル依存症に向き合う当事者スタッフ

現在グレイス・ロードでセンター長を務める池田さんは、ギャンブル依存症当事者として苦しんだ経験を持っています。

「僕も過去にギャンブルで何回も借金をしたり、ギャンブルが原因で仕事を辞め、離婚しています。自分でもギャンブルを止めなければいけないと思って、しばらくはギャンブルから離れたのですが、時間が経つとまたギャンブルをしてしまう。それをみていた母親が色々調べてくれ、『ギャンブル依存症』という病気の存在を知り、回復施設であるグレイス・ロードをみつけてくれました。当時は自分がギャンブル依存症であることを全く認められず、自力でなんとかできると思っていたのですが、説得されて入所することになりました」

池田さんは現在、回復プログラムの第1ステージを修了し、第2ステージに進んでいます。第2ステージでは、入所者それぞれの事情に合わせて、アルバイトや復職・再就職といった社会復帰のプログラムが組まれます。池田さんの場合は、グレイス・ロードの代表者から、施設スタッフとして働くことを提案されたといいます。施設で働きながら、ギャンブル依存症からの回復を実感しているようです。

「一人では生活することのできない状態でプログラムを受けはじめ、今は第2ステージに。グレイス・ロードで研修を受け、雇用してもらい、給料をいただける形になりました。まだ途上ではありますが、依存症から回復してきているのかなと思っています」

◆ ミーティングを通して自分と向き合う

第1ステージの回復プログラムの中心になるのが、ミーティングです。人の話を聞き、自分の話をして、自分がどうしてギャンブルに依存してしまったのかという背景を掘り下げます。今後ギャンブルから離れた生活をしていくために自分を見つめます。これまでの考え方を変え、性格を変え、最終的には「生き方を変える」とも言えます。同じ依存症の仲間とともに、こうして自分を見つめることが「回復への一番の道」だとされ、一日一回以上ミーティングがあります。

ミーティングは三種類。グループミーティングは、「言いつばなし、聞きつばなし」の場で、人の話を聞いて自分の話をするのみです。エンカウンターミーティングでは、対話を通してその人の内面まで掘り下げていき、

様々な気づきを得ることを目指します。そしてハウスミーティングでは、入所しているメンバー同士で、生活の週間予定を考えたり、困り事や悩み事があればそれをシェアして問題を解決していきます。

◆ スポーツプログラムがミーティングの効果を高める

これらのミーティング以外に、グレイス・ロードでは週1回ずつ、レクリエーションプログラムとスポーツプログラムを取り入れています。入所者には、パチンコやギャンブルしか趣味のなかった人が多いので、映画を観たり海水浴に行ったりして、その人に合う新しい楽しみを見つめるきっかけを作ろうという試みです。これらは、周囲との関係づくりのトレーニングにもなるといいます。

「ギャンブルはたいがい、一人でやるものなので、人間関係を築くことが得意な人が少ないんです。だから、同じ悩みを持った人たちとともにプログラムを受けながら、信頼関係や周りの人への理解を身につけていきます。そうした経験や考え方が、その後社会に出たときに生きていきます」

なかでもスポーツのプログラムは、心の健康と身体の健康に同時にアプローチできる利点があります。

「依存症からの回復においてはミーティングの役割が一番大きいのですが、長年続けたギャンブル中心の生活で衰えた身体も回復が必要なんです。まずは体力をつける意味で、スポーツプログラムを行っています。さらに団体競技では、仲間との信頼関係を築くことにもなります」

グレイス・ロードのスポーツプログラムは、野球やフットサルを中心に、天候の悪い日や冬場には体育館で行うバレーボールやバスケットボールなど、多岐にわたります。最近ではソフトボールがプログラムとなっており、真剣な中にも和気あいあいとした雰囲気のある現場だといいます。

◆ 団体競技の意義

池田さんは、こうして純粋に楽しめる時間があることが、「生きづらさを抱え、ギャンブルに逃げてきた」過去を抱えている入所者にとって貴重だと語ります。普段感情を出さない人が負けず嫌いな感情を出すなど、新しい側面を知ることもできます。

「室内でのミーティングももちろん大事ですが、外に出て大きな声を出したり、身体を動かすことは、健康を取り戻すだけでなく、ストレスの解消にもなります」

ミーティングで自分と向き合う日々を繰り返す中、全身を動かし、大声で応援するスポーツは、心身のリフレッシュに大いに役立つそうです。また、スポーツの場でスタッフと入所者が一緒に笑い合えることは、両者の距離を縮め、回復プログラム全体に良い影響を及ぼします。

「スタッフにとって、入所者とスタッフは当事者同士のフラットな関係だと認識していますが、入所者からは立場の違う人として見られがちです。だから入所者とスタッフが一緒にのこをやるというのは、スタッフにとっても大事なことなんです。スポーツしているときは、立場や年齢も考えないじゃないですか。普段あまり話せない人が相手でも、その人がソフトボールのバッターボックスに立つと、応援したりヤジを飛ばしたりと場が湧くので、自然とみんなの距離が縮みます。スポーツの後は、ミーティングや生活面でも対話が増えますね」

グレイス・ロードの入所者には人見知りの人が多く、スポーツを通じて、入所者同士、また入所者とスタッフが仲良くなることで、ミーティングが円滑に進むようになるそうです。みんなで楽しめることを重視する点からも、やはり団体競技は意義深いようです。

「なんで団体競技なのか、あまり考えたことはなかったのですが、やっぱり楽しいからですかね。『みんなでマ

ラソンやるぞ』と言っても、僕たちの場合は『きつい…』ってなるでしょうね。体力はつくでしょうけど」

スポーツプログラムは、入所者とスタッフ、あわせて30人が全員で参加します。通常9対9で行う野球も15対15でプレーします。どんな競技でも全員参加を心がけ、全員でスポーツを楽しんでいます。

「別に勝ち負けにこだわるとか、そういうことじゃなくて、楽しくやればいいのかな。みんな心待ちにしてるんです」

◆ スポーツによる地域交流

スポーツは、施設と地域との交流にも役立っています。地域のソフトボール大会や運動会に参加し、地域住民と交流することにより、ギャンブル依存症への理解を促進しているといいます。

「地域の方に『この地区の運動会に参加してみない?』と声を掛けてもらって参加しました。小学校の校庭で行われる昔ながらの運動会なんです。地区ごとにシートが敷いてあって、そこに私たちもみんなで行って、近所の人たちと一緒に座って自分の地区を応援したんです。それがすごく嬉しかった。ギャンブル依存症の回復施設が近くにできて、地域の皆さんには不安な気持ちがあったと思うんですが、区長さんが『グレイス・ロードのみなさんと近所の人たちが、交流しながら理解を深めてもらいたい。危険など無いんだよ。地域と一緒に生活していきましょうよ』と、ありがたい後押しをしてくださりました」

池田さんにとって、運動会に参加することは、ギャンブル依存により失った、近隣付き合いの機会を取り戻す意味もあったようです。

「運動会なんて久しぶり。私の場合、自分の子どもの運動会にすら、ギャンブルをやっていたせいで参加できなかったんです…。運動会は地域の人、特に子どもたちと交流できてすごく楽しかったです。やっぱりスポーツは、人と人の距離を縮めますね」

◆ 3回連続、ダイバーシティカップ参加!

グレイス・ロードは、スポーツプログラムの一環として、2015年よりダイバーシティカップ(P35～39)に3回連続で参加しています。入所者たちは多くの参加者が競い合うこの催しをとっても楽しみにしていて、2か月前からスポーツプログラムはフットサルが中心となります。また、参加したことによりフットサルの楽しみを知った入所者たちは、土日のセルフケアに近くのフットサル場へ足を運び、費用を出し合ってフィールドを借りてフットサルを楽しむまでになっています。

趣味の獲得がギャンブル依存症回復の一翼を担うならば、ダイバーシティカップはギャンブル依存症回復に、わずかながらも貢献していると言えるのではないのでしょうか。

(逢坂仁葵)

03 自分らしく生きるためのインフラ創り

リヴァトレ

社会復帰後の居場所 —1人きりにならないために—

オムハビユナイテッド

リヴァトレ（以下、リヴァ）はうつや双極性障がいの方を対象とする休職者・離職者のための通所型施設です。「自分らしく生きるためのインフラをつくる」というビジョンのもとに生まれたサービスで、生活リズムの回復、ストレス対処力や職場実践力の向上、キャリア支援のプログラムを提供しています。スポーツを活かしたプログラムも積極的に取り入れています。

オムハビユナイテッドは、リヴァのスポーツプログラムから独立したフットサルチームです。リヴァの卒業生が中心となり当事者によって自主運営されています。レギュラークラスやエンジョイクラスといった参加者のレベルに合わせた練習の他、不定期に開催するイベントで参加者同士の交流を図っています。

◆ 元の生活に戻すのがゴールではない

うつや双極性障がいといった精神疾患を原因に仕事を辞めたり休職したりした人を、再び働けるように支援することを再就職・復職支援といいます。リヴァの再就職・復職支援の特徴は、単に「仕事に戻る」ことをゴールにするのではなく、病気になったことで「自分らしい生き方」を見直すきっかけにすることです。

創業メンバーのひとり取締役でもある青木さんは、会社設立のきっかけを次のように語ります。

「働いていて病気になってしまうということは、これまでの生き方に体と心が悲鳴を上げてしまった結果だと考えたんです。単純に休んで元の状態に戻るのではなく、自分の生き方というものをもう一度考えるのに、ある意味、疾患になったというのはチャンスなんじゃないかと」

うつ病・双極性障がいの特徴のひとつとして、ひきこもりがちになることがあげられます。ひきこもりになると活動量が減るので体力や筋力が落ち、また服用する薬の影響もあって、体重が増加する場合があります。一度体力が低下してしまうと、よりいっそう活動することが億劫になるため、それでまた状態が悪化するという悪循環が生じます。影響は身体面ばかりではありません。ひきこもると人間関係が希薄になり、人と話す機会が極端に少なくなるので、会話をする事自体に恐怖をおぼえるようになってしまいます。

リヴァにやって来る人の多くがこのような悪循環に陥るなか、スポーツプログラムはどのような意味を持つのでしょうか。青木さんは、身体面と心理面という2つの側面があると説明します。

「健康の3要素は睡眠・食事・運動と言われますが、はじめに運動からアプローチするのが効果的だと言われることが増えてきました。なぜかというと、運動すると体が疲れるので睡眠の質が上がり、エネルギーを消費して胃腸も動くので食欲が出るのです。精神科の先生の中には積極的に運動を推奨している方もいますね」

心理面では、コミュニケーションに対する心理的負荷を軽減することが挙げられます。社会復帰をしていくためには、対人コミュニケーションへの恐怖心を克服することが不可欠です。しかし単にコミュニケーション能力のトレーニングだといわれると、苦手意識が先立ってうまく話せず、逆効果になってしまうこともあります。リヴァがスポーツプログラムを重視しているのは、スポーツに参加している間に自然に人と話す機会が生まれる

からでもあるのです。

「コミュニケーションのトレーニングをしたいときに、『さあどうぞ、話してください』と言われるよりも、運動しながら話すほうが抵抗が少ないですね。運動という主目的があって、そのおまけとしてコミュニケーションが取れるので。いきなりコミュニケーションをとろうとなると、しばらく引きこもっていたこともあって、人と話すこと自体が怖くなっている。だけど運動を一緒にしていると、いまやっている運動を共通の話題にして話ができるという点で、コミュニケーションの敷居が下がるのです」

◆ 「安心の場」を設計する

スポーツプログラムに限らず、リヴァのプログラムには随所に利用者の心理的な負担を取り払うような設計が組み込まれています。ひとつは安心してその場に参加できるための工夫（「安心の場の設計」）、もうひとつは自然にコミュニケーションを取り合う機会を増やすための工夫（「コミュニケーションの場の設計」）です。

一つ目の「安心の場の設計」は、例えば、リヴァではプログラム参加者同士でたくさん拍手をします。仮に失敗することがあっても、相手のチャレンジへの承認の気持ちを示すため拍手を送ります。

「『ナイスチャレンジ!』みたいな声をかけあっていると、お互いの信頼関係もできてくるし、個々人の考えも自由になってくる。自信をもって行動できるようになってきます」

スポーツプログラムにも、誰もが参加しやすいように「安心の場の設計」が散りばめられています。リヴァで行うスポーツは運動の負荷があまり高くなく、ルールに工夫を凝らしているため、上手い下手の差が出にくくなっています。例えば卓球なら、得点ではなくラリーの続いた数で競ったり、椅子に座りながらプレーしたり、ラケットを何か別のものに持ち替えてみたりします。そうすることで、運動が苦手な人でも楽しんで参加できるようになっています。

「単純に勝ち負けを競うだけだと、運動が上手い人が勝つわけです。そうではなくて、与えられた環境下でいかに協力しあうことができるかということを大事にしています。また普通と違うちょっと滑稽なルールになっているので、それだけで笑ってしまうということも狙っています。楽しい。人と協力をする。夢中になる。心拍数も上がるので運動としての効果もあります」

二つ目が「コミュニケーションの場の設計」です。例えばサッカーをするときは、シュートを打つことができる範囲を限定することで、必ずそこまでパスでつながなければいけない状況を生み出します。またウォーキングのような比較的コミュニケーションを取り合う必要の少ない運動プログラムを行うときには、他の参加者とペースを確認しあうことを作業課題として組み込んでおくことで、自然に会話ができる状況をつくっています。

「コミュニケーションをとらなくてはならないと思ってしまうとしんどくなるので、自然にコミュニケーションが発生するように設計を変えるようにしています」

リヴァのスポーツプログラムを通じて、体力や筋力の増加、コミュニケーション能力の向上が段階的に表れていきます。しかしリヴァは「これからの人生に進む一時的な居場所」です。社会復帰してリヴァを離れた後、運動やスポーツの機会がなくなり、運動を起点とした好循環を維持できなくなってしまえば困ります。そのため青木さんは「リヴァで運動をやるどころからスタートして、復職・再就職後もスポーツができるコミュニティを自分で探して入ってこようね」と伝えているそうです。

◆ 社会復帰後の居場所としてのオムハビユナイテッド

そのようなコミュニティのひとつとして機能しているフットサルチームが、オムハビユナイテッド（以下、オムハビ）です。オムハビは、リヴァでのスポーツプログラムでフットサルをやっていた当事者が、社会復帰した後

〈第1部〉当事者を「エンパワー」する

も一緒にフットサルができるようにと、立ち上げました。リヴァの「安心の場の設計」や「コミュニケーションの場の設計」も、オムハビのチームづくりに引き継がれています。

また、うつ病・双極性障がい当事者同士で集まっていること、つまり、自分と似た境遇を経験している人々のみで構成されているということも、「安心の場」を形成する要素となっています。オムハビの運営を担当する一之瀬さんとたけしさんは、次のようにいいます。

(たけしさん)「OB・OGも自分で体調の悪い時期を経験しているから、お互いの事情が理解できるんです。例えば、仕事に復帰したあとはなかなか生活のリズムがつかれず、フットサルをお休みされる方って多いんですよ。みんなそういう復帰の時期の難しさについても理解があります」

(一之瀬さん)「同じ精神疾患を経験した当事者だから、お互いに理解しあえる仲だし、認め合える、そういう関係性がこのチームにはありますね」

オムハビに通うことは、実際にリヴァのスポーツプログラムと同じような効果を参加メンバーにもたらしているといえます。社会復帰をした後に環境や生活習慣の変化などから精神的に余裕を失ってしまった当事者が、オムハビに通うことで再発予防の効果も果たしているそうです。

(たけしさん)「フットサルに始めて表情が変わり、すごく元気になる人もいます。その人にとって、週末のフットサルを楽しむにすることで、平日仕事を頑張ることができ、生活にメリハリがつくと思うんです。オムハビは参加者全員にとって同じ意味や役割を果たしているわけではないのですが、ある参加者に聞いたら、病気ですごくつらいときに、ドリブルの練習をしていたんですって。それぐらいフットサルが好きなんです。オムハビの中で有志を募って一般の大会に出ているのですが、彼はそのリーダー格をやっています。それを本人が自分から楽しんでやっています。リーダーシップもとれているし、コミュニケーションする能力もついていると感じます」

オムハビではフットサル以外にも、練習後の交流会をはじめ、不定期の花見やオムハビ発足記念イベントを設けるなど、参加者が一緒に過ごす時間を重視しています。社会復帰にともなう難しさを、仲間と共有することができるからです。

(一之瀬さん)「リヴァを利用している時は、そこに仲間がいっぱいいます。プログラムに参加するためにリヴァにいけば、自然と仲間に出会える場があるわけです。でも社会復帰すると、仕事と家との往復になるから、そういう場がなくなりがちです。また仕事を始めて、ストレスも溜まるし悩みがきたりもする。そういう時にオムハビに参加することで、似た経験を持つ参加者と交流ができるし、運動してストレス発散もできる。週末にフットサルをやることを楽しみやモチベーションにして、また1週間仕事を頑張る、みたいなところもありますね」

オムハビの活動に課題がないわけではありません。参加者の競技レベルがあがってきたため、新規参加者の定着率が悪くなるというジレンマや、参加者が増えたことでニーズが多様になり、それらを把握しにくくなってきたことを、二人は課題として挙げます。しかしフットサルチームとして強くなっていくことにより、課題を解決しようとするなかでオムハビというチームの価値をより自覚できたといえます。いまオムハビは、アドバンスクラス、レギュラークラス、エンジョイクラスという3つのレベルを設けることで、参加者の多様なニーズに応えていこうとしています。

そうやってより多くの人の居場所としてオムハビを育てていくことにも、二人はやり甲斐を感じているようです。

(一之瀬さん)「自分が一番楽しみたいから。チーム内でぎくしゃくしたら自分が嫌。自分が楽しめるようにやっていきたいです」

(たけしさん)「参加者がどういうふうを考えているかの把握とニーズの把握、コミュニケーション。今後もそれは常に意識しなければいけないし、大切にしていきたいです」

(大森亮平)

まとめ

01

社会復帰支援プログラムとスポーツ

第1部では、ギャンブルやうつ病などの精神疾患といった病を抱える人たちが、社会に復帰していくためのプログラムのなかでスポーツが活用されている事例を3つ取り上げました。これらの病からの社会復帰のプロセスでスポーツがどのような役割を果たしているのかをあらためて考えてみましょう。

まず、依存症や精神疾患は、どのように当事者を社会から遠ざけてしまうのでしょうか。これらの病を抱えると、活動量が低下します。活動量の低下は体力の低下を招くので、ますます活動量が低下するという悪循環になります。活動量が減るとは、社会生活に参加しなくなるということを含み、長引けばどんどん孤立を深めていくこととなります。孤立してしまうと他者から承認を得る機会がなくなるので、自己肯定感が低下し、ますますひきこもってしまうこととなります。社会関係を絶ってしまうことで、必要な支援を受けられる機会も減ってしまいます。図1の下半分は、健康の喪失が社会性の喪失、そして自己の喪失へとつながるメカニズムを模式的に表しています。

こうした悪循環を断ち切って、社会復帰に向かうために3つの団体は包括的な支援プログラムを用意しています。この場合、スポーツはそのなかの一つの要素でしかありません。それでも各団体がスポーツの要素を取り入れていることには、それなりの理由があるのです。

図1

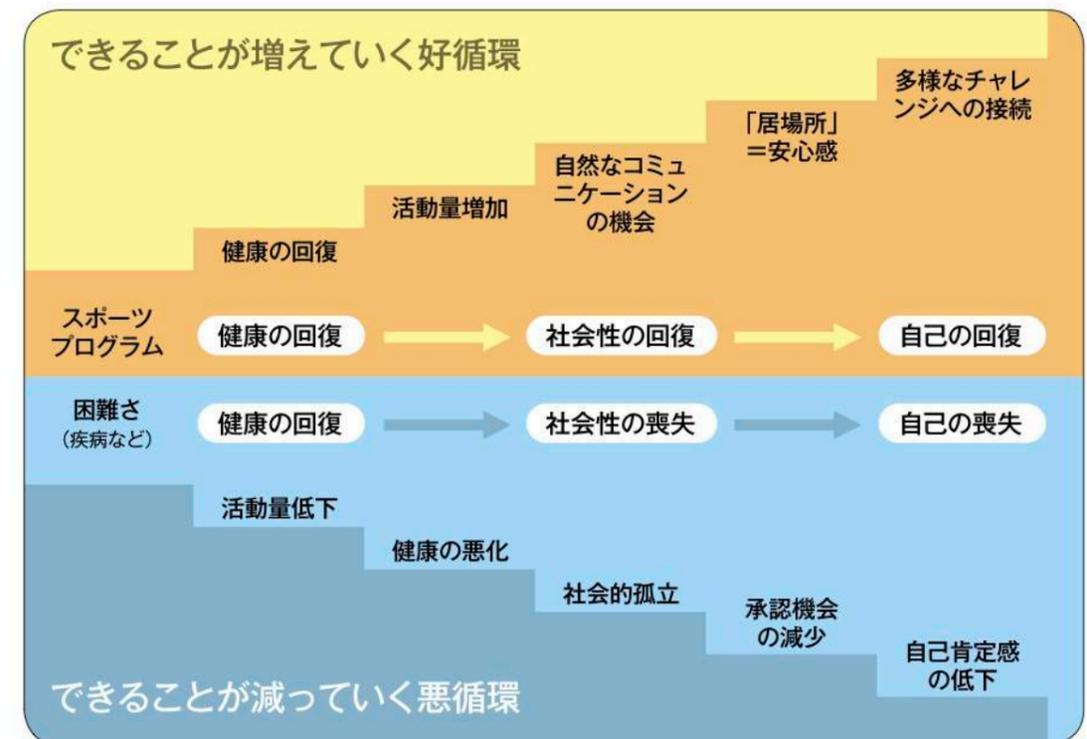


図1の上半分は、病を原因にした社会的排除の悪循環からの脱出を、スポーツがどのように助けるのかを図示したものです。

最初のステップは、低下してしまった体力を取り戻すことです。運動することを起点に、よく食べ、よく寝るといった基本的な生活習慣の基盤をつくることができます。こうして体力が回復すると、1日の活動量を増やすことができるようになります。スポーツプログラム以外の社会復帰支援のための様々なプログラムにも、参加する自信がついてくるのです。これが2つめのステップです。

3つめのステップは、自然なコミュニケーションの機会ができることです。社会生活に戻っていくには、人とのコミュニケーションをとれることが不可欠です。長く孤立した生活を送っていると、人と会ったり、話したりする自信が損なわれてしまいます。しかし、そうした人にコミュニケーションのトレーニングを課すことは容易ではありません。「コミュニケーションをしなれば!」と身構えてしまうからです。ところがスポーツの場では、コミュニケーション自体が目的にはなりません。サッカーでパスをするときに名前を呼びあったり、試合のあとに感想を言い合ったりということが、ごく自然におきます。こうしてスポーツの場で話をしたことがある人なら、別のプログラムで一緒になったときも、安心して話し合ったりできるかもしれません。

4つめのステップは、スポーツの場自体が、その人にとって大事な社会関係の場になることです。居場所というキーワードが何度も登場するように、安心して一緒に時間を過ごせる仲間がいることが、心の安定をもたらしてくれます。

5つめのステップは、そうした社会関係のなかで様々な経験に出会うことです。たとえば、チームのなかで組織運営上の役割を担うようになれば、チーム内外の人と相談したりする機会が生まれます。これは支援プログラムのなかで得られるコミュニケーションの機会とは、また違った経験です。そうして、やがては団体やチームの外側の世界と接続していきます。大会や交流会に参加すれば、慣れ親しんだ仲間内だけでなく、見ず知らずの人ともコミュニケーションをとることになります。事務的な折衝もあれば、交流を通じて知らなかった世界を知る機会もあるでしょう。こうして団体の直接的な支援を離れ、自分ひとりでも社会生活に参加する経験を積み重ねていくこととなります。

このように、スポーツプログラムへの参加は、段階的に様々な機会に接続していくプロセスに繋がっていきます。孤立して不安を抱え、自信がもてない状態から、少しずつできることが増えていく実感を得ることができるのです。それは健康を回復し、社会性を回復し、自己を回復するプロセスです。

最後に、こうして少しずつ階段を上っていくプロセスでは、スポーツが“楽しい”ということがとても大事な要素です。「社会復帰のトレーニング」だと考えてしまったら、苦しい感じがしてしまうかもしれません。でもスポーツなら、ただ楽しいからという理由で、参加を続けることができます。そうして楽しんでいるうちに、知らないうちにできることが増えていく。それがスポーツのよさかもしれません。

いずれの支援プログラムも、最後は自立を促すことがゴールです。でも自立はそんなに簡単にいきません。ときに信頼できる支援者の元へ戻りたくなることもあるでしょうし、自立したからこそ自然に助け合える存在が必要です。そんなとき、スポーツプログラムで出会った仲間が、そういう存在になってくれることもあるでしょう。まっすぐ階段を上る手助けだけが、スポーツのよさではありません。スポーツを通じた仲間がいて、「居場所」があることそのものにも価値があります。第2部では、この居場所としてのスポーツという側面に注目します。

(鈴木直文)

〈第2部〉「居場所」をつくる

04 コートの中は共生社会の実験場

日伯経済文化協会 (ANBEC)

日伯(日本・ブラジル)経済文化協会(以下、ANBEC)は、1949年に創設され、以下の3つの事業を柱として活動しています。

- ①ブラジル移民史を語り継ぐ事業
- ②日伯交流未来人材育成と在日ブラジル人二世世代の教育・職育支援事業
- ③草の根日伯経済文化交流推進事業

今回は、②の事業のなかで行われている茨城県での在日ブラジル人二世世代の支援・交流事業のひとつであるサッカー交流会について取り上げます。

◆ 在日ブラジル人の抱える困難と ANBEC

日本には現在約18万人のブラジル人が暮らしています。そのうち永住を決めているブラジル人やその家族は過半数を超えと言われ、その数は年々増加しています。

ANBECは様々な活動の中でも特に、茨城県に住むブラジル人の子どもたちを対象とした教育・職育支援に力を入れています。茨城県には約5800人のブラジル人が暮らしており、20歳以下の若者・子どもは約1400人に上ります。彼らの抱える問題としてまず、日本語や日本文化の習得があげられます。さらにANBEC専務理事の栗田さんは、「それ以上に、日本社会が『均一社会』である故の問題もある」と指摘します。

「ブラジル人の子どもたちは、日本という『均一社会』で生きるための準備の遅れが、ハンディキャップとなってしまっています。もちろん、それを乗り越えて育つ子どもたちも少なくありませんが、多くの子どもたちは、それらが希望する学業や就労への妨げとなっている現実があります」

栗田さんは、平均的日本人なら自然と身につく習慣や考え方、経験といったものを彼らが共有できていないことが、日本で生活をしていく上でのハンディキャップになると考えています。

「日本で生まれて日本で育っていると、親や身近な人々から学校以外の場でも自然と学び身につくのですが、そういうものが、移民の子どもにはなかなか難しいわけです。社会に通じる個の力をしっかりと付けることが肝心であり、そのためには、人一倍の努力と情報が必要です」

また、日本社会との接点が少ないことも問題であるといいます。

「多くのブラジル人学校の生徒は日々の生活において平均的に日本社会との関わりが少ない。公立学校でもブラジル人で固まる傾向があり親子での平均的日本人社会との関わりは多くありません。ブラジル人生徒が多い学校だとその傾向は一層強いと言えます。近年は地域での外国人生徒も増加傾向にあり(半数以上の生徒が外国人という例もある)、日本社会との接点を工夫してつくっていくことが大切です」

このような在日ブラジル人の問題を改善する方法を模索しながら、ANBECは活動を行っています。

◆ 熱意をもってやりたいことをやる

栗田さんはANBECの子どもの教育・職育支援部門の多岐にわたるボランティア活動の中で、関わっている個人の意欲に基づいた草の根の活動を大事にしているといいます。

「サッカーも学習支援も、すべてが無報酬のボランティアです。『本当にやらなきゃいけない、やりたい』と思っている人が集まっているため、その雰囲気子どもにも伝わります。だから、子どもたちは他の人が言っていることを一生懸命聞いています。子どもだけでなく、親もすごくそう感じてくれています」

ボランティアの学生がANBECをプラットフォームとして様々な活動を行っていることも、特徴として挙げられます。その一例が、「ブラジル人の子どもたちが、日本社会と接触できる機会をつくる」ことを目的として2014年に始まったサッカー交流会です。この交流会が始まるきっかけは、あるボランティアの発した「サッカー部があるといいね」という言葉でした。栗田さんはこれに賛成し、「やるならば、ひとつの学校だけじゃなくていろいろな学校から人を集めよう。地域のブラジル人の若者が日本社会と交流できるような場になれば、もっとその価値がでてくる」と考え、現在のサッカー交流会の形ができました。

「サッカー交流会のようなボランティアによる活動は、本当にやりたい人が3人集まれば成功すると考えています。学生と私たちが、それぞれの年代・経験・人脈に応じて、能力を持ち寄ってやっていけばよいと思っています」

このように、ANBECではやりたい人が熱意をもって活動することに重きをおいています。学生ボランティアの本気のアイデアを、栗田さんたちのような大人がフォローし、在日ブラジル人の子どもたちにとって意味のある事業をつくっていく。そんなスタンスで活動しています。

◆ ボールを蹴ることで、一つの空間が出来上がる

ANBECが行うサッカー交流会には、老若男女たくさんブラジル人が集まります。そして、彼らと日本人の参加者たちとがごちゃ混ぜになってサッカーをします。交流会は2か月に1回程開催され、ANBEC側の幹事とブラジル人の常連グループのリーダーが中心になって運営しています。地元の中学校のグラウンドを会場として利用し、その学校のサッカー部の監督や部員たちも参加しています。

「幹事が『どんなゲームをしようか』と話し合いながら進めていきます。来る人も毎回同じとは限らないため、個人の得意なことを聞きながらわいわいやっています」

こうして作られるANBECのサッカー交流会の場は、「ポルトガル語、日本語が飛び交う実に不思議な空間」です。

「みんな必死にサッカーをやっているから、ポルトガル語でも日本語でも『おい、ボールよこせ』と言えば、コミュニケーションができちゃう。外から見れば同じチームにブラジル人と日本人がいるようだけれども、プレーしている本人たちに国籍は関係ないんです」

こうした空間が作り上げられるのは「サッカーだからこそ」だと、栗田さんはいいます。

「サッカーは、1つのコートの中に22人が一緒になってプレーするわけですから、人と人の距離が早く縮まります。そこで、ブラジル人同士はポルトガル語で声を掛け合う。よいプレーのときはポルトガル語で褒め合う。そうすると、ポルトガル語を学んでいるボランティアの学生たちも、『そんな言い方があるんだ』と、自然と新しい表現を覚える。このように、いろんなことがグラウンドでは自然と起きます」

◆ チチオ、俺、勉強するよ

このようにサッカーを通じた交流を続けてきたことで、ブラジル人の子どもたちに次のような変化が起こってきました。

「子どもはサッカーの場で、そこに来ているいろんな大人と自然と話をします。子どもと那些人たちの間に信頼関係が出来てくる。そうすると1人や2人、人生相談をしてくるような子がいる。また、小さいときから知っているサッカーの常連の子だと、子ども同士もお互いに気心が知れてきています」

サッカーによって信頼関係ができた子どもたちは、中学や高校卒業後の進路について栗田さんやANBECのメンバーに相談をしにくるようになります。就職についても、アドバイスを求めにきます。交流会に来ている同年代の日本人にも、相談をしているといいます。

「日本の学生や若者が同じ空間にいて、ブラジル人の若者にとってプラスになります。日本の学生は自分も楽しめるだけでなく、結果的に社会貢献になっています」

家庭や学校などでは相談しきれないことも、サッカーやANBECの現場では話すことができ、そこから支援につながっていくこともあるといいます。

「問題がいろいろあった中学2、3年の男の子が、僕の近くに寄ってきて、肩を肘でつき『チチオ』というんです。チチオというのはおじさんという意味なんです。『チチオ、俺、勉強するよ』とやってきた。高校受験がしたいんだと。あまり勉強できるわけじゃないけれども、先生に聞いたら、まだ勉強すれば高校受験に間に合うと言われたと。それじゃあ、交流会に来ている日本人のお姉ちゃん、お兄ちゃんに言って手伝ってもらおうか、と」こうして、大学生のボランティアが在日ブラジル人の子どもたちの勉強のお手伝いをするANBECの「寺子屋」という取り組みにつながっていきます。

◆ 「試合」ではなく「交流」を

2017年6月、筑波大学のグラウンドで、同大学サッカー部を交えてのサッカー交流会が開催されました。運営にあたったのは、ANBEC側の幹事と筑波大学サッカー部の主将やマネージャーでした。企画にあたって、栗田さんは彼らに1つのアドバイスをしました。

「試合じゃないよと。体育会の人はずっと勝ち負けになってしまうけれども、そうじゃなく、『交流をキーワードに何ができるか考えてみて』と」

それを踏まえて開かれた交流会は、メンバーをランダムに組み合わせたミックスゲーム、所属チーム同士の対抗試合、最後にブラジル人選抜と日本人選抜との試合、という形式になりました。

「若者たちが、交流するためにはどうしたらよいか、ああしようこうしようと思ったんだと思うんです。そのうえで、せっかくだから真剣勝負もあったほうがいだろうという風に工夫してくれた。このプロセス自体が異文化交流になっています」

学生やブラジル人も含めたいろいろな人が、一緒に話し合いをして大会をつくる。そのなかで、筑波大学生や学生ボランティアたちにとっても、普段とは違う学びがあったようです。この交流会には100人を超える人が集まりました。こうしてサッカー交流会は、在日ブラジル人たちが抱える問題を、多くの人に知ってもらうことにも役立っています。

(千葉佳奈子)

05 フットサルチームをつくりたいわけじゃない

FYO

FYOは、四つ葉学舎、ピーンズふくしま、チームエナジーという、福島に拠点を置いて活動する3団体から成るフットサルチームです。四つ葉学舎は、若者のゼミ活動、ピーンズふくしまは、不登校や引きこもりの方の孤立問題の解決、チームエナジーは脳性マヒの方々のフットサルチームであり、多様な背景を抱えた人々がフットサルを通じて交流をしています。

◆ 取り残された人を生まないフットサルチーム

FYOが結成されたのは、ダイバーシティカップ第一回大会(P35～39)が開催された2015年。チーム発起人である鈴木さんが、若者支援団体の利用者やスタッフ同士の交流を促進する目的で呼びかけると、福島の各地からチームメンバーが集まります。不登校の10代の若者もいれば、震災によってフットサルをする仲間を失った脳性マヒの方もいます。こういった様々な背景を持つ人たちが一緒にフットサルをしていることには、非常に大きな意味があると鈴木さんはいいます。

「僕たちは社会から取り残されてしまう人たちをなくしたいと思っている。それなのに抱えた事情がちょっと違うから一緒にフットサルをできないなんて矛盾してしまうでしょ」

それぞれの事情で国の教育制度に置き去りにされてしまったり、震災によってスポーツをする仲間を失ってしまったり、社会とのつながりが薄くなってしまった人々の「居場所」をつくるのがFYOの役割のひとつなのです。

◆ 就労だけではその人の価値をはかれない

鈴木さんがFYOを立ち上げた背景には、フリースクールに通う若者が発したある言葉がありました。

「僕が関わっている若者が、街で昔の同級生に会って同窓会に誘われたというんです。『でも行かない』っていうのでその理由を聞いたら、『私には同級生と共有できる“過去”がないんだ』って。自分の事を振り返ると、仲間と一緒に過ごした時間や経験で“いま”が成り立っている部分がある。だからその若者の言葉が心にズシッときました。共有できる思い出や過去がないって言うなら、じゃあそれをこれからつくってみようって思ったんです」

鈴木さんをはじめとするスタッフにとって、FYOにはもうひとつの大きな意味があります。それは「就労への単線モデル」に対する抵抗です。つまり就労することだけが人生の正しい選択であるという社会の認識に対して、疑問を投げかけることです。

「就労するかしないかという軸だけで、本人たち自身も悩んでしまっている。社会の無言の圧力を感じてしまっている。その苦しみを語るんです。働いていないことを周りは心配するし、親も『いつ働けるようになるかな?』と訊いてしまったり。でも就労っていう軸だけでみられるのは、すごく苦しい。その人の存在価値は、本来就

労するかしないかだけでは決められないはずなんです。その人のよさが発揮できる別の軸だってあるわけです。その人らしさが目に見えて発揮される場を用意することができたらいいなと思っています」

就労を通じた自立を望む周囲からの声にプレッシャーを感じて窮屈な思いをしている若者たちが、就労ではない別の目標を見つけるきっかけを、フットサルの場でつくろうとしているのです。実際に、メンバーにとってフットサルが意味のある存在となっていることを鈴木さんは実感します。

「アルバイトをしているメンバーもいるのですが、他の人よりも仕事ができないと判断されると、仕事を削られるときがあるそうなんです。することがない時間が長いと、どうしてもネガティブなことを考えてしまって落ち込みやすくなる。だから自分の敵は『暇』だ、『時間』だって言っていたんです。それがこの間話したら、時間があることが嬉しくなってきたそうなんです。FYOで運動する機会があって、四つ葉学舎では学ぶ機会がある。それが生活の“ハリ”になっていると。時間があって辛いんじゃないって、時間があることがすごい嬉しくなってきたって言っていました。FYOでフットサルを始めて良かったなって、すごく思いました」

◆ シュートを決めるのも楽器で応援するのも同じ価値

FYOの最大の特徴は、フットサルでボールを蹴る以外にも、非常に多様な参加の形があることです。例えば、チームを応援するためのTシャツ、旗や応援歌などをつくることにも力を入れています。周囲に合わせなければいけないという意識が強い若者が集まってきているため、あえてチーム内での役割を多様にし、スポーツが苦手な人でも個性を発揮できるようにしているのです。

「その人が持っている特性で輝ける役割を、つくりたいというか、探したい。つくるんじゃないって、すでにあるはずなんです。だからそれを探したい、というか、気づきたいです」

もちろんフットサルが活動の中心にある以上、フットサルで活躍したいという気持ちもメンバーにはあります。しかし、ボールを蹴らない参加の形を重視することは、ボールを蹴って活躍することを否定することとは違います。そのバランスをうまくとることが、鈴木さんの腕の見せ所です。

「みんなはっきりとは言わないけれど、本当は活躍したいとか、ゴールを決めたいという気持ちがあるんだろうなというのは、見ていて感じます。だから僕がフットサルをする以外の参加の形をつくりたいと考えていることが、フットサルで活躍したいという気持ちを誤魔化すことになっていけない。シュートを決めることも、楽器で応援することも、同じ価値であってほしいと思う。でもやっぱりシュートを決めてチームが勝ち進みたいいなことに、みんなの意識が向いてしまいがちになる。だからいろんなメンバーと話しながら、解決していきたいと思っています」

誰もが参加しやすい状況を意識しつつも、誰もが参加しないことができる「不参加の自由」も確保しています。ここにも、周囲に合わせなければいけないというプレッシャーを感じさせたくないという、鈴木さんのスタンスが表れています。

「体調によっては気持ちがのらない人もいるし、その日の周りの人のテンションについていけず、なかなか場に参加できない人もいます。そういう人には『そこで見てていいよ〜』と声をかけたりします。コート脇ですとストレッチやってるだけの人もいますけど、それでいいと思っています」

参加しやすい場づくりと、参加しなくてもいい場づくり。こうした鈴木さんの考えは、FYOに所属するチームメンバーにも浸透してきているようです。フットサルの練習後の振り返りで、「今日の練習はみんな熱くなりすぎて、普通のフットサルチームみたいだった」という発言が出ることもあるそうです。メンバーが多様な価値を自然と大事にすることができていることを鈴木さんが実感したのは、第3回ダイバーシティカップ(P37～39)への参加後にチーム内MVPを決めていたときのことで、

「僕だったら、一番光の当たりにくい人をあえて選んで表彰しようと考えてしまったりするんです。でもそれ

だと本当に自分らしく輝いた人を選んだことにならないかもしれない。だからMVPを一人決めるところは、チームメンバーに選んでもらいました。そうしたらYちゃんが選ばれたんです。彼女はフットサルで活躍したわけではなく、ハーフタイムショーの時に歌で会場を盛り上げたんです。それをみていたチームメンバーがみんな『今日はYちゃんです。決まりだよ。』って」

◆ 旅先で生まれる「種」を生かす

FYOのメンバーにとってフットサル大会は、その行き帰りも含めた「旅」です。それは思い出づくりの場であり、成長の場でもあります。遠く離れた見知らぬ土地に行くことは、若者たちにとっては大きな挑戦です。

「自分が長旅に耐えられるか、心と体の調子を長時間保ってられるか、不安を抱えているメンバーもいます。先日青森への遠征を議論したときも、自分は心身面でそこまで長い移動時間を耐えられるかわからないという人がいて、みんなもその気持ちわかるよね、という話になりました。東京でのダイバーシティカップ(P35～39)まではOKとか、MKBカップ(P31～34)が行われる宮城まではOKとか、その都度話し合っています。彼らにとってはちょっとした冒険なんですよ。『冒険に打ち勝つことが素晴らしい』ということではないのだけれど、彼らが自分を試すことができる機会になっているという面もあると思います」

「冒険」だからこそ、「思い出づくり」にもなるのかもしれない。たとえば旅先での打ち上げも、そんな「冒険」のひとつです。

「東京の中華レストランに入ったんですが、僕らにとっては結構ハードルが高いんですよ。東京でお店入るといってハードルと、旅先で知らないお店に入るといってハードル。それに金銭的にも厳しいです。でも東京で打ち上げするのは楽しいことでもあるんです。そういう意味ではプラスの経験です。大会に参加するモチベーションにもつながっていますね」

大会に参加すると、メンバー全員で長い時間を共有することになります。それは、お互いをもっとよく知り合うための貴重な時間だといいます。

「東京でのフットサル大会に参加するのって、一見面倒臭いんです。でも一種のスタディーツアーのようなもので、行き帰りの旅の中でじっくりいろんなことを共有できます。大会に参加することで『種』ができるというか。帰りの車では一人ひとりの物語が聞けます。大会でのプレーの話、自分の話、色んなことをみんなで語り合います」

心のなかを打ち明ける時間なので、ときにはネガティブな感情が出てきてしまうこともあります。誰かが辛い思いを話し出し、それが仲間にも伝播して、みんなで暗い気持ちになってしまったこともあるといいます。でもそうやってメンバーの本物の気持ちを感じられることが、FYOをもっとメンバーにとって居心地のいい場所にしていくことにつながるのだといいます。それを鈴木さんは、「種」と呼ぶのです。

「メンバー同士で工夫が生まれるかもしれないし、自分も含めて一緒に考えていこうという想いがあります」

いまではFYOが遠征にでかけるとき、「車中レクリエーションリーダー」が活躍するようになっています。なぞなぞを出すなどして、移動中の場を盛り上げるのです。把握された課題に対して解決策が生まれたことも重要ですが、チーム内に新しい役割を見つけることができたという点にも大きな意義があるでしょう。今後もFYOは、フットサルというスポーツの場に様々な参加のバリエーションを生み出し続けていきたいといいます。

「応援をしたり、アイテムをつくったり、自分たちが参加する大会の雰囲気や引っぱり合おうみたいな自負があります」

豪快にシュートを決め、盛大に応援を送り、そしてフットサルという枠組みにとらわれない新しい取り組みで、FYOはこれからも大会を盛り上げていくことでしょう。当事者が心から参加したいと思える活躍の「場」がある、それがFYOというチームなのです。

(大森亮平)

06 やりたいことを生き生きとやるのが、自立への土台

茗荷谷クラブ / FC 茗荷谷

茗荷谷クラブは、不登校や引きこもりといった若者の心の問題と向き合うケアサポート団体として、1988年に設立されました。対人関係や学校・職場に行くことに困難を感じている10～40代が集い、演劇部、サッカー部、ボランティアなどの活動を通じて、自分に自信を取り戻すこと、社会とつながっていくことを目指しています。

FC 茗荷谷は、茗荷谷クラブのサッカー部員だった利用者とOBが立ち上げたフットサルチームです。2013年に茗荷谷クラブのサッカー部から独立し、茗荷谷クラブのスタッフはほとんど関与せず、チームメンバーの自主運営によって活動しています。

◆ 「やりたいこと」が、自立への意欲を引き出す

茗荷谷クラブの魅力は、就労支援に限らず、サッカーや演劇といったスポーツ文化活動にも力を入れている点です。それぞれのやりたいことを実現する場や機会を提供することが、利用者の主体性を育み、自立に向かっていく基礎をつくることにつながると考えているからです。茗荷谷クラブのチーフを務める井利由利さんは、次のようにいいます。

「例えば、利用者から『サッカーをやりたい』という希望があれば、『じゃあやろうか』って言ってみんなで汗だくになってやる。演劇も、やりたいという希望があったから続けてきました。一人の人から希望があれば、『じゃあやってみようか』と背中を押します。直接的に社会参加とか就労支援ということでもなくても、やりたいことを生き生きとやれるということが、結局は自立に繋がっていくと思っています。自分がやりたいことをやることで、自分を取り戻すというか、自分と自分が繋がったと感ずることができる。そういう中から意欲が出てくる。それが『土台』として大事だと思っています。自分のなかから湧き出す意欲という土台ができると、もう自分で自立に向かっていけるようになります。途中で何かを投げ出してしまふ心配もなくなります」

スポーツや文化活動の意義は、単に自立に向けて成長していく場をつくることだけではありません。

「思春期に引きこもっていたり、不登校だったりした若者なので『青春』のない人が多いんです。サッカーも、『部活をやりたいけどできなかった』『青春の思い出が欲しい』という若者の想いからスタートしています」

やりたいことに打ち込む中で「自分」という人間を知り、たどって来た過去を振り返って見つめる。孤独を感じながら生きてきた利用者たちは、心を許せる仲間たちとともにつくってゆく時間のなかで、閉じていた心を少しずつ開いていきます。

◆ 若者の勇気と意志がつくったFC 茗荷谷

「茗荷谷クラブの中でサッカーをやりたい」そんな利用者の声をきっかけに、サッカー経験者だったスタッフを中心となってサッカー部がつくられました。その活動が始まってから2年後、サッカー部は、ある理由から

FC 茗荷谷として独立することになります。

茗荷谷クラブのサッカー部はクラブの活動時間を利用した練習に加え、大学サッカー部との練習試合や地域のリーグ戦への参加など、競技性の高い本格的なものを志向していました。しかし活動を続けていくうちに、よりレベルの高いサッカーをし、大会や試合で勝つことを目指すスタッフと、勝利よりもサッカーを通じた「楽しさ」や「仲間づくり」を望む利用者との間に、隔たりが生まれるようになってしまいました。そして、活動のあり方や、それぞれが目指すサッカーについて話し合いを重ねた末、サッカー部に所属していた利用者とそのOBが自主運営するフットサルチーム「FC 茗荷谷」を立ち上げることになりました。

FC 茗荷谷が独立した経緯は、井利さんにとっても印象深い出来事だったようです。

「あの時、彼らは相当悩んだと思います。若者同士でも、スタッフとも、かなり時間をかけて話し合っていました。『勝つためのサッカーじゃない。自分たちは楽しむためのサッカーがやりたい』って。あそこで『自分たちでやるんだ』って踏み出したことは、大きなことだったと思います」

井利さんにとってこのエピソードが印象的だったのは、普段から利用者を支援する際に次のような姿勢で臨んできたからでした。

「なかなか『これがやりたい』って出てこない人たくさんです。『〇〇すべき』っていうのは出てくるのですが、『〇〇したい』っていうのがなかなか出てこないの、『これやりたい』って言ってくれた時は、全面的に応援するようにしています」

信頼するスタッフに対して強く主張することは、利用者にとってとても勇気のいることだったかもしれませんが。しかし人とコミュニケーションを取ることに困難を感じてきた彼らが、自らの意志をはっきりと伝え、思いをぶつけたことは、スタッフにとっても嬉しい出来事だったのではないのでしょうか。もちろん若者たち自身にとっても、葛藤を乗り越えて次のステップへと繋がる大きな一歩だったことを、井利さんの「踏み出したことは大きなことだった」という言葉が物語っています。

◆ フラットな関係だから感じる、仲間と共有する楽しさ

現在 FC 茗荷谷のリーダー的存在として活動する神田さんは、茗荷谷クラブのサッカー部からチームが分かれた時から中心メンバーの一人として運営を任されています。

「チームとして明確なビジョンがあるわけではないんですが、フットサルでコンスタントに身体を動かすことで運動にもなるし、メンバー間で交流したり楽しく息抜きができればいいかな、というスタンスでやっています」

現在チームメンバーの人数は10人ほどで、茗荷谷クラブに通うようになる前からサッカーをしていた人と、未経験者だった人が、半々の割合で参加しているそうです。年齢や技術にメンバー間で開きがあるチームをまとめる上で、どのような点に配慮しているのでしょうか。

「フラットな関係というのは常に意識しています。フットサルの戦術がよく分かる人と分からない人がいるので、トップダウンみたいになってしまうこともありますが、一方的に意見を押しつけるのではなく意見を交換し合えるようにできればいいなと思っています。相手の反応による場所もあるので難しいですが、上下関係ではなくフラットであることがいいなと僕は思っています」

レギュラーメンバーと補欠メンバーの区別をつけていた時もあったそうですが、今は試合当日に来ているみんなが均等に出場できるよう調整しているそうです。「一緒にいて、体験を共有できて、楽しい」というチームの雰囲気が、FC 茗荷谷の魅力の一つであるといえます。

◆ 「自分たちでやっている」という自信

中学時代、サッカー部に所属していた経験のある神田さんは、通院していたクリニックの勧めで茗荷谷クラブのサッカー部の活動に参加するようになりました。チームがFC 茗荷谷に移行してからも、週に一度の練習や試合を続けるうちに自分の中で小さな「変化」が起こり始めたといいます。

「はじめの頃は、茗荷谷クラブの中でも、スタッフに話しかけてもらったり、他の利用者の方に気遣ってもらったことが多かったです。でも最近は色んなチームと大会を通じて交流する機会もあるし、主体的にコミュニケーションが取れたり、初対面の人とも交流できるようになってきました。精神的にタフになってきているのかなと思います」

神田さんの場合、スタッフとの関わり比べると、茗荷谷クラブの他の利用者と会話する機会は多くありませんでした。しかし、フットサルをしているとボールを蹴り合っている間に緊張がほぐれ、自然と会話することができるようになると話します。初対面の人と接する時でも、パスを繋ぐためには対話を必要とします。フットサルを通じて、色んな人とコミュニケーションが取れるようになったことは、神田さんの自信となっているようです。

また、FC 茗荷谷での活動は、中学時代には味わうことのできなかった充実感を与えてくれる場にもなっています。

「体を動かして笑ったり、悔しがったり、その時間の中にハマり込めることがフットサルの醍醐味だと思うんです。今のチームで自分は中心的な役割を担っているし、勝ったり負けたりあるけれど、そこで経験する喜びや悔しさには、昔サッカー部でプレーしていた頃とは違う達成感があります」

中学のサッカー部を辞めた後、「楽しめるサッカーがやりたい」と思ってきたという神田さん。

FC 茗荷谷のフットサルでは、試合に負ける悔しさも含めて「楽しい」と感じるができるといいます。普段は感情を表に出すことはほとんどないそうですが、活動はチームの仲間とともに喜怒哀楽を共有する場となっています。

いまもFC 茗荷谷の活動を「サポーター」として見守る井利さんも、若者の中に起きる変化を感じ取っています。

「体力がつかえましたね。立つ姿勢から変わりました。『自分たちでやっている』という自信もついたのでと思います。それに人との距離の取り方が上手になったなと思います。言うことは言う。断ることは断る。でも、優しく接するし面倒も見る。チーム内で起きる色んな問題と向き合う中で、そういう人との距離の取り方が身に付いていくのかなと思います」

茗荷谷クラブの活動でも、利用者同士がぶつかることは当然あるそうです。そうした経験も大人になるためには大事なことでと井利さんはいいます。

「異なる性格を持ち、違う人生を歩いてきた人たちが集まれば、衝突が起きることは不思議なことではありません。他者と自分を比べてしまうことも、時にはあります。それでも等身大の自分を認め、自分で自分にOKが出せるようになって初めて、『どう生きたいか』って人生を切り開いていけるのではないのでしょうか」

(栗栖由喜)

まとめ
02

自分らしさ + チャレンジ + 相互理解 = 居場所

スポーツを通じて居心地の良い社会関係につながることは、生きづらさを抱えた若者の社会復帰の重要なステップだといいました(まとめ1/P15,16)。ここではそうした居場所づくりにおけるスポーツの役割について、もう少し詳しく見てみましょう。

第2部で扱ったのは、不登校やひきこもりを経験した若者と在日ブラジル人という移民の若者への支援にサッカーやフットサルを取り入れた事例です。これらの若者の共通点は、大多数の日本の若者が通り過ぎる「普通の学校生活」を経験していないことです。部活や修学旅行といった日本の学校ならではの共通体験をしていないことは、どこかで心の傷になっていたり、相互理解を妨げる要因になったりするようです。このことは「青春がない」「共有できる過去がない」「日本で生まれ育っていると自然と教えられることを教えられていない」といった言葉に表れています。

そしてそうした共通体験を持たないことは、学齢期を過ぎてからも尾をひいてしまうことがあります。不登校やひきこもりの場合には、「他の人と違う」ということが引け目になるかもしれません。移民の場合には、日系ブラジル人のコミュニティの中に閉じこもってしまうことが、受け入れ側である日本社会に溶け込んで暮らすことを妨げかねません。

いずれも「人と同じ」であろうとすることから、問題が生じているといえるかもしれません。不登校やひきこもり経験者の場合、人と同じでなければならないという圧力自体が、彼らの生きづらさの原因になっています。たとえば、学校を出る年齢になれば就労をしなければならない。そういうプレッシャーが、かえて彼らが1歩を踏み出す勇気を持ってない原因かもしれないのです。移民の場合には、日系ブラジル人同郷者という同質な集団への帰属意識が、ホスト社会との壁になってしまっているかもしれません。

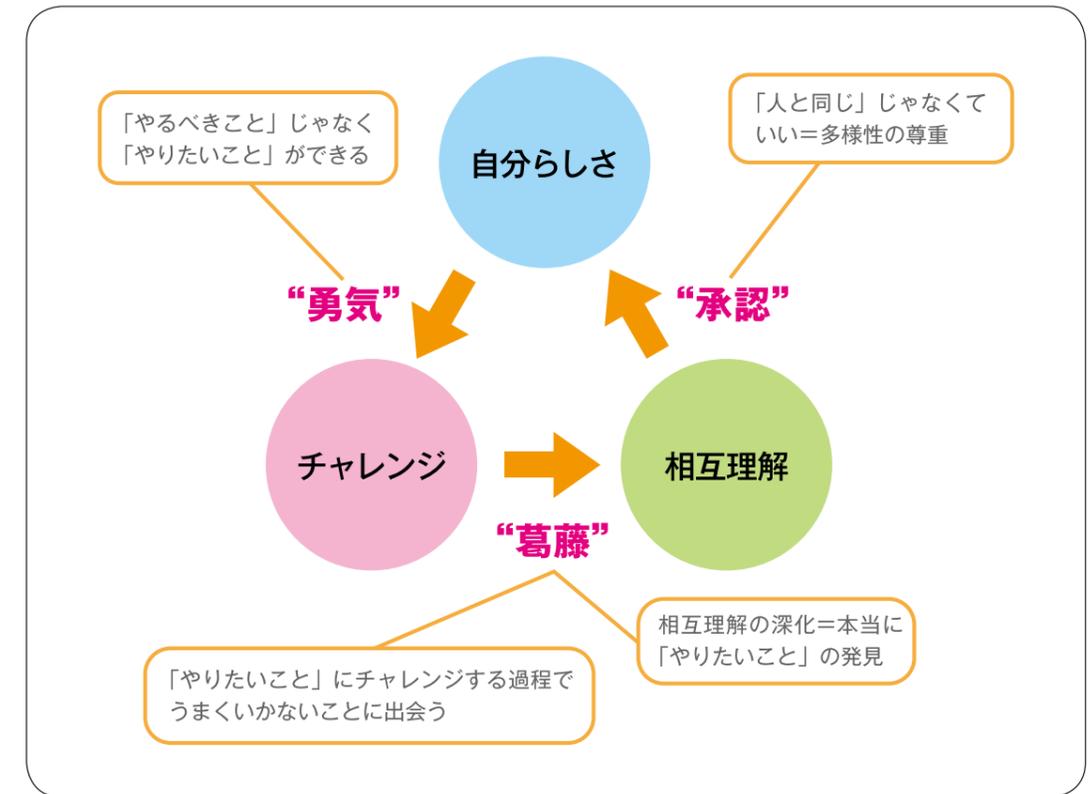
同質でありたいと願うことは、悪いことばかりではないでしょう。しかし過度な同質性への圧力が、一人ひとりが本来持っている個性を発揮して「自分らしく」あることを妨げてしまうこともあります。3つの事例は、いずれもスポーツを居場所づくりに活かすことで、過度な同質性から逃れ、多様性を認め合う関係性を育んでいるようにみえます。

ではそのような多様性を認め合える「居場所」をつくる要素とは何でしょうか。そこでスポーツが有効に機能するのは、どのような仕組みなのでしょう。相互理解、自分らしさ、そして、チャレンジという、3つのキーワードで考えてみましょう。図2に示すように、3つのキーワードは、相互に関連しています。

ANBECのサッカー交流会は、異文化間の相互理解の場づくりの好例です。まとめ1(P15,16)で見たようなサッカーの場での自然なコミュニケーションの積み重ねが、在日ブラジル人の若者と日本人支援者との信頼の形成につながり、それが自然な形でキャリア形成支援へつながっていく様子がみられます。茗荷谷クラブとFYOでも、支援者と当事者が対話をしながら、当事者が本当にやりたいことを発見し、実現されるプロセスが語られています。

やりたいことができるということは、自分らしくいられるということです。茗荷谷クラブでスポーツをはじめとした文化活動を取り入れるのは、それが若者がすすんで「やりたいこと」だからです。就学や就労への努力が「やるべきこと」と感じられてしまうのと対照的です。自分のやりたいことを存分にやったという経験が、自己肯定感につながり、様々なことにチャレンジしていく素地をつくるのです。FYO

図2



でも、フットサルは、各人の個性にあった活躍の場を作り出すきっかけと考えられていました。

「やりたいこと」を通じてチャレンジに踏み出せば、うまくいかないことも出てきます。スポーツの場では、自分らしく感情を出しあえるし、だからこそ相互理解も生まれます。けれど、スポーツが勝ち負けを競うゲームであることが、居心地のよさを阻害してしまうこともあります。勝ち負けの競い合いが楽しいのがスポーツだし、競技力が向上していくことも楽しいものです。でも競技性が高まりすぎると、ついていけなくて脱落したり、新しく仲間に入りにくい状況が生まれたりしてしまいます。

FC 茗荷谷が独立していくプロセスでは、競技志向が強くなりすぎたという当事者側の訴えをきっかけに、支援者側との対話が生まれ、自分たちらしいフットサルへのスタンスが定まってきました。FYOでは競技を楽しみたい気持ちを大事にしつつ、応援や歌のパフォーマンスなど、多様な関わり方が見出されていきました。ANBECの場合も、毎回の参加者の顔をみながら、適切なスタンスが選ばれる様子が語られています。

このように競技性が参加を妨げかねない葛藤は、相互理解を促す対話のきっかけにもなります。FYOの参加者が遠征の帰り道に本音を吐露してみんなで落ち込んだり、そこからレクリエーションリーダーという新しい役割が生まれるのも、みんなで大会に参加するというチャレンジがあってこそではないでしょうか。

スポーツがある種の葛藤を表面化させることをうまく捉えれば、相互理解のための対話が始まり、新しい「自分らしさ」が発見されていく。他人に合わせて同質化していくのではなく、多様な個性を認め合える関係性が育まれていくのです。

(鈴木直文)

〈第3部〉大会を通じて「居場所」を広げる

07 「コミュニケーション・ツール」 としてのフットサル

千葉『共に暮らす』フットボール協会

千葉『共に暮らす』フットボール協会（以下、トモフト）は、千葉県内の精神障がい者サッカーやフットサルを推進することを目的に設立された協会です。トモフトの目的は次の2つです。

- ① 精神障がい者やその支援者によって構成されるフットサルチームの運営や活動を支援すること
- ② サッカーやフットサル（総称して「フットボール」）のある生活を通じて、誰もが普通に生活できる社会、すべての人が共に暮らす社会をつくること

前身は精神障がい者フットサルの千葉県大会「コルツァカップ」の実行委員会です。コルツァとは、千葉県のシンボルである「菜の花」を意味しています。2015年にトモフトとなってからは、精神障がいの有無に関係なく誰もがフットサルを通じて交流することを目的とする大会「オープンリーグ」も開催しています。

◆ 患者を「保護」という「当たり前」を壊す

トモフトの設立以前、もともとの精神科病院では、リハビリやレクリエーションを目的としたプログラムの中でフットボールが用いられ始めていました。他の病院でもフットボールが取り入れられていることを知ったサッカー好きの精神科医や精神保健福祉士らが声を掛け合い、2009年にトモフトの前身であるコルツァカップ実行委員会がつけられ、翌2010年から大会を開催するようになりました。

トモフトの理事長で精神科医師の佐々さんは、リハビリやレクリエーションにとどまらず、精神障がい者のためのフットサル大会という競技の場を本格的につくろうと考えた理由を、次のように語ります。

「精神科の患者さんは入院期間が非常に長いケースが多く、就労や社会参加などの機会がほとんどなくなってしまいます。患者さん自身も医療関係者も、危ないことや無理はしないというように『保護』しようという意識が強かった。たしかに精神障がいの当事者が社会に出ていこうとすると、障がいのためにうまく働けなくて、周りから責められて傷ついてしまうという事は多いです。医療関係者は特に、当事者がそういう状況に陥らないように守らないといけないんじゃないかと思ってきたんです。ただ時代の流れとともに、危険なところには目を配りながらも、チャレンジできる場をつくるべきんじゃないかという声が上がりました。フットサルはスポーツなので、当然勝ち負けがついてくる。でも、負けて悔しい思いをすることも必要なんじゃないか。実は彼らが失敗から学ぶチャンスを奪っているんじゃないか。そんな思いがあって、競技としての精神障がい者フットサルをやることにしたんです」

当事者を「保護」することが医療関係者の責任であるという意識からすれば、精神障がい者が病院という隔離された場所で生活することは「当たり前」のことでした。病院の中での暮らしでは、社会との繋がりも、何かに挑戦する機会もありません。競技としての精神障がい者フットボールを立ち上げたことは、そうした「当

たり前」を問い直すひとつのチャレンジでした。

◆ フットサルの技術と社会性が連動する？

コルツァカップは、①精神障がい者スポーツの振興と精神障がい者保健福祉の普及・啓蒙をはかり精神障がい者の社会参加を促進すること、②千葉県において精神障がい者フットサル大会を定着させることを目的として掲げています。千葉県で成績上位になったチームは、精神障がい者フットサル全国大会の関東地域予選大会への出場権を獲得することができます。コルツァカップはもうすぐ10周年を迎えようとしています。現在トモフトには、精神障がい者である当事者も委員として参加しています。継続することで参加者に様々な変化が見られるようになってきています。

「最初はこちらが用意していたプログラムをやっていたのが、だんだん自分たちで企画を出すようになってくると、活動全体を通じて当事者たちの社会性が自然と増していきっていると実感しています。打たれ強くもなりますよね。最初に大会に参加した時は一言も話さなかった人が、1年も経つとしっかり意見を言ってリーダーシップをとるようになるんです」

フットサル技術の向上と精神的な安定とが連動して起きるのが不思議だといいます。

「最初は下手な人も、1、2年経つとプレーが変わるんですね。統合失調症の方で、まさに猪突猛進でボールを持つとそのまま突き進んでしまう人がいたんです。人と接する時も堅物で、人とぶつかってしまうことも度々ありました。でも、数年するとボールをただ前に蹴って進むとやるんじゃなくて、一呼吸置いて止めたり引いたりできるようになる。そうすると、面白いことに人とのコミュニケーションでも融通が利くようになってくるんです。気にしなくていいことは、気にしないでおけるようになる。フットサルの技術とコミュニケーション能力のどちらが先に向上したのかは分からないのですが、少なくともそういう変化があって、すごいなあ」と

変化してゆく当事者を身近で見えてきた佐々さんは、普段病院で接する精神障がい者からは想像もできないような力強い動き、ハツラツとした彼らの姿に驚かされてきたと言います。同時に、大会は精神障がい者や障害そのものに対する「何かに挑戦するなんて無理だ」という固定化された考え方に疑問を投げかけ、精神障がい者フットボールの推進に貢献してきました。

◆ 競技としてのフットサルを超えて

しかし大会のレベルが高くなるにつれ、新たな課題が生じつつあります。競技スポーツとしての精神障がい者フットサルの普及が進む一方で、競技レベルが上がるほど未経験者や新たな参加者に対するハードルが高まってしまうというのです。

「競技としてのスポーツと楽しむためのスポーツの乖離が大きくなってしまいうという危険性があるんです。あまりにも競技レベルが上がってしまうと、参加者の運動能力によって優劣がついてしまう。それが人間関係の序列化に繋がってしまうと、『やっぱり自分はだめだ』という自己否定に陥りかねない。そうすると技術の足りない人はドロップアウトしてしまったり、はじめから参加を敬遠してしまうことになってしまふ。それでは本末転倒です。スポーツを通して体を動かし、楽しみながら仲間づくりができる環境で、小さくてもいいから社会を知り、精神障がいの当事者にありがちな『わたしは何もできないんだ』という自己認識に変化がおきる。それが一番大事なのです」

こうしたジレンマへの対処として、トモフトは「オープンリーグ」を開催することを決めます。オープンリーグには、精神障がいの有無にかかわらず、共にフットサルを楽しみたい人なら誰でも参加することができます。

文字通り「開かれた」大会です。オープンリーグの大会要項には、「本交流会は、精神障がいの有無に関わらないフットサルを通じた交流を行う事でソーシャルインクルージョンの実現を目指すとともに、精神障がい者やひきこもり、不登校などの当事者の社会参加促進を目的とする」と謳ってあります。「ソーシャルインクルージョン」とは、誰もが『生きやすい』と感じる社会をつくることです。

この大会では、参加者がランダムに振り分けられたチームで試合を行います。点数や順位はあえてつけません。ゲームの間には、簡単なゲームをしたり体を動かしながら自己紹介をしたりと、初対面で会う参加者たちが緊張をほぐせるような工夫が意図的に織り込まれています。各チームに一人ずつファシリテーター(これも障がいのある人、ない人ともに担当しています)が付き、チームミーティングでの会話や交流が円滑に進むように工夫しています。他にも、ウォーキングフットサルや、大会の思い出を「五七五」にまとめた歌を詠むなど、ユニークなアイデアが随所に散りばめられています。最後はチームごとに振り返りを行い、チームメンバーへの寄せ書きを記す時間を設けています。

「一日一緒に過ごしていると、お互いチームメンバーの事をちゃんと見ているんですね。出来上がった寄せ書きを読むと、感動してしまいます」

最後に開かれるアフターパーティーでは、トークイベントやワークショップが行われます。参加者がフットサルだけをして解散するのではなく、ゆっくり言葉を交わして交流し情報交換できる場を用意することが目的です。

「その日のイベントを表面的に過ぎて終わりではなくて、大会後の『余韻』があるといいなと思っているんです。次に繋がるようにね」

◆「コミュニケーション・フットボール」

精神障がいの有無にかかわらず参加者を募り、ミックスチームをつくるというアイデアは、トモフトの委員のひとりである精神障がいの当事者から出されたものでした。

「当事者の企画運営力が発揮され、サッカーの持つ可能性みたいなものをひとつの形にしたものがオープンリーグです。コミュニケーションのツールとしてフットサルを利用するという発想です。僕らはこれを『コミュニケーション・フットボール』と呼んでいます。この手法こそトモフトの最大のコンテンツであり、僕らのアイデンティティです」

フットサルを通じて人々の繋がりを生み出すこと。それが大会を開く意義であり、トモフトの存在意義であると佐々さんは言います。

「『コミュニケーション・フットボール』という言葉にはこだわりがあり商標登録を取ろうとしたのですが、名前が一般的過ぎるために難しいだろうと言われてしまったんです。そこで、『出合って、蹴り合って、話し合って』というキャッチフレーズを考え、3つの『あって』を意味する『TREATTE フットボール』という言葉を作りました。イタリア語でtreは、「3」を示すんです。今度はこれを登録商標に申請してみようって話しているところなんです」

トモフトの試行錯誤は、精神障がい者や精神障がいそのものに対する知識や理解を広げ、当事者・支援者の枠を超えて様々な人の中に変わるきっかけを与えることに繋がっているようです。

「精神障がいの当事者を保護して危険を避けるように囲いをするのではなく、失敗できるような環境と受け止めるような視点を持つこと。少しずつですが、トモフトの周りではそのような変化が起きてきていると思います」

(栗栖由喜)

08 「あきらめない姿勢」を 大人が身をもって示す

まきばフリースクール

「まきばフリースクール」は、フリースクール、ファミリーホーム、自立援助ホーム、デイサービスなど多岐にわたる活動を行っています。誰もが「安心できる心の居場所」をテーマに掲げ1999年に創設されました。事業開始当初、宮城県北地域には若者の自立・教育支援を行う団体がなかったことから、自分たちで一からつくるべきだと考え「プログラムではなく人ありき」をモットーに様々な活動を行ってきました。2012年からフットサルのプログラムをはじめ、2016年と2017年はMKBカップという大会を主催しています。

◆ あきらめ癖がついている子どもたち

まきばフリースクールには、不登校や非行、様々な障がいがある他に行くところがない若者が多く来ています。理事の中山さんに、団体の特徴をききました。

「活動が先あってそれにあてはまる人をサポートするということではなくて、その人に合う活動がなければその場でつくっていきこうという発想でやってきました。それでどんどん活動が増えていって、今みたいに色々なことをやるようになったんです」

集まってくる子どもたちは、虐待やいじめなど自分ではどうしようもない事情で傷つけられてきたため、「あきらめ癖」がついているといいます。

「自分ではどうしようもない状況におかれていると、『あきらめる』ということが自分自身を保つ唯一の方法になっている場合があります。何かをやりたいと思っても、傷つけないための一番の方法は、それをやらない、あきらめてしまう、ということだからです」

まきばフリースクールにやってきた当初は、誰かに傷つけられないように、自分を強く見せるために、あえて印象が悪いような服装や態度をみせる子どももいるそうです。フットサルは、そうした「傷つきたくなくてあきらめてしまう」子どもたちが小さなチャレンジに踏み出すためのステップのひとつです。

「フットサルに来ているのは、不登校の子どもや、就労支援を受けていて社会の中でやっていく前のステップとして利用している若者などです。様々な事情から家庭で生活できず自立援助ホームで暮らし、働きながら自立を目指している子どもも、休みを利用してフットサルに参加しています」

参加者はフリースクールを利用している子どもだけでなく、自分のホームのように居場所へ帰ってくるOBOGなどで、年齢も10～40代と様々です。そんな多様な参加者にとって、まきばフリースクールのフットサルプログラムは、どんな場所なのでしょう。

◆ 子どもの力を世の中に見せたい

まきばフリースクールのフットサル活動は、2012年から週1回の頻度で行われています。以前からスポーツ活動は単発で行っていましたが、継続して集団で何かやっていくということはできていなかったそうです。定期

的にフットサルを行うようになったのは、回復してきた若者たちにチャレンジの場を作りたかったからです。

「フリースクールで段々元気になってきたり回復してきた子どもたちにとって、もう少し成長できる場とか学びの場という部分で、ちょっとそれまでやってきた活動では物足りない感じがしてきていたんです」

そんなとき、東日本大震災で子どもたちと共にボランティアをしたことが、中山さんの背中を押します。

「この子たちが社会の役に立つんだということ、この子たちが力を発揮できるんだということ、世の中に対して見せていくような活動も大事だと思ったんです」それがフットサルプログラムのはじまりでした。

「何かチャレンジできるようなこと、苦しいことがあっても達成感がある活動を皆でやりたいと思いました。ちょうどサッカーをしてきた職員がいて、私もサッカー好きだったので、自由参加ではあるんですけど、フットサルをきっちりプログラムとしてやろうと決めました」

◆ 生きるための「基礎」をつくる居場所としてのフットサル

あきらめ癖をもつ子どもたちは、フットサルをはじめた当初、追いつけそうなボールでも見送ってしまったり、自分の責任ではないかのように振る舞ったりしていたといいます。しかし、練習を重ねていくうちに子どもたちに変化が見られます。

「例えば初めて点を取るとか、そういう経験をしたときに、ちょっと変わりますよね」

毎週練習を続けていけば点を取れるようになる。自分でがんばることで達成できることがある。フットサルを通じたそうした経験や学びが、就労支援や普段の取り組み自体を後押しすることにもつながります。

「あきらめ癖それ自体をだめだって言ったってしょうがないわけです。それは、子どもがここに来るまでに一生懸命になって身につけた生きる知恵だから。でも私としては、フットサルをやることで、自分で努力すれば目標を達成できるという体験を培って、自分でやれることがあると思いついてもらいたいです」

フットサルでチャレンジを積み重ねながら、社会に出て働く基礎となる人間の力を身に付けてほしいのだといいます。

「それがないと基礎がないところに家を建てるような感じにしかならないのかなと思います。基礎がなければ家はグラグラしてしまう。無風のまますっといけばいいけれど、外に出れば仕事がうまくいかないとか、何かでつまづくことって当然あるわけです。年齢を重ねていけばいくほど、大変なこととか苦しいこととかどんどん増えるわけですね。だからこそ今のうちに、失敗やうまくいかない状況に対して、自分でどう対応するか、人にどうやって頼るか、そういう人間としての基本みたいなところを育てていくのに、フットサルはすごく意味があるなと思いますね」

同時にフットサルの場は、参加者や卒業生にとって安心できる居場所でもあります。

「アルバイトをしながら自立を目指している段階の子どもたちにとっては社会人のサークルのような場所だろうし、フリースクールに通う子どもたちにとっては部活代わりになっています。フリースクールを卒業して働いている子どもたちも、プライベートな人間関係を他でつくるのがどちらかというと苦手な子が多いので、いつでも来ていいよ、という感じでやっています。休みの日にフットサルに来ることで、普段の仕事や生活を頑張っているのだとすると、受け皿としての意味はすごく大きいと思います」

◆ 支援者と当事者の垣根が消える

子どもたちとスタッフの関係づくりにおいても、フットサルは良い影響をもたらします。例えばスタッフよりもフットサルが上手な子どももいるので、対等な関係が築きやすくなります。

「私ができるところは提供して、私ができないところは提供してもらって、っていうフラットな関係がつけられるんです」

スタッフのできない部分を見せることも、子どもたちにとっていい見本になります。

「できないところを支援者が見せられるようにならないとだめだと思う。フットサルが上手くない職員がコートに入ったとき、どういう姿に見えるのか。人にちゃんと適切にフォローしてもらうために、どういうコミュニケーションをとればいいのか。そういうことを身をもって見せるチャンスなんです。例えば、サポートしてもらったら『ありがとう』って言うとか、自分が失敗したときにどういう態度をとるのが全体にとってよいのかとか、そういう振る舞い方をみせられる」

そうして支援者と当事者との間に、気のおけない関係がつけられていきます。

「フットサルで関わっている支援者とメンバーだと、一歩突っ込んでいろんなことが言えたりするようになるんですね。支援する側とされる側という考え方をしていると、あまり『がんばれ』って言えないんです。みんな既に自分なりにがんばっているし、あまり負荷をかけすぎると来られなくなってしまったりするので。だけどフットサルと一緒にやっていると、こちらも自然に『がんばれ』って言えるし、メンバーもそれを素直に応援の言葉として受け取って、がんばろうって思ってくれる。そういう関係性をつくれると思っています」

◆ スポーツのむずかしさにあえて直面する

競技スポーツならではの難しさを乗り越えることも、「基礎」をつくるためのチャレンジのひとつです。フットサルでは技術や体格の違いで差が出るため、チームがだんだん上手な方に寄っていった下手な子は来られないという分断が生じてしまったことがありました。中山さんにとってそれは「みんなが楽しむにはどうしたらいいのか考えるのに良い機会」だったといいます。

「スポーツがもつそういう難しさをなくしてうまくやるというよりは、それをきちんと経験してほしい。うまく直面してほしい。どうしたら良い方に変えていけるのか。問題が生じないためにどうするのか。問題が起こった時にどう対処し、どういう方向に持っていったらいいのか。それを経験させたいんです」

葛藤を乗り越える手段は、メンバー1人ひとりとスタッフとの対話です。

「メンバー1人ひとりとは話し合いがうまくはないんです。そもそも自分の中で体験や想いを咀嚼し、表現するところまでがひとつのチャレンジです。例えば、自分の失敗で点を取られたことを、自分で消化しきれずモヤモヤしたり、しんどくなってストレスがあったり、いろいろ葛藤するわけです。なので、全員で話し合いをすることがシンプルにはできない状況にある。そこはスタッフが一對一でしっかり聞いていくことを私たちは大事にしています。どういう気持ちだったのか。なにがしんどいのか。それをプラスにしていくには何が課題なのか。どうしたいのか。自分と他の人の考えが食い違ったときに、どうやって歩み寄るか。一緒に考えます」

まきばフリースクールのスタッフがメンバー1人ひとりと向き合って試行錯誤するなかで生まれたのが、まきばフリースクールの主催するフットサル大会、MKB カップです。

◆ MKB カップ：「大事な仲間たち」が幸せになれる舞台

MKB カップは2016年に始まり、今年2回目を迎えました。東北各県のフリースクールに声をかけ、一堂に会して行きます。この大会は「子どもたちの好きなことをがんばれる機会」です。

「そういった機会が失われたまま大人になっていく若者たちの、育ち直しというか、生き直しという意味があります。自分の中でずっとくすぶっている気持ち、劣等感だったり、心残りだったりっていうのを、大会に出てチャレンジすることで、少しでも消化してくれる。自分の人生に対して、いろんなしんどさはあるけれどもこれでいい、と思えるようになってもらえたらいいな、と。フットサル大会を開くことで皆がそういう機会をきちんと得

られる環境をつくってあげられるんじゃないかと思っています」

中山さんにとって手作りで大会を開く意義は、子どもたちに大人ががんばっているところを見せることです。まきばフリースクールの子もたちが出られるような大会が全くないというのなら、自分たちで作ってみせる。大人が「あきらめない姿勢」をみせるための MKB カップでもあるのです。

「今そういう大会がないから『ないな』ってあきらめてしまふんじゃないかと、『じゃあつくろうよ』っていうことで、つくりました。そういう大会が、いろんな人の応援で、どんどん育って行ってます。僕らが手作りで始めた大会が、ひとつのものとして成立していく。それに向かって大人が一生懸命やるってことをみせることそのものが、私は教育だと思うんですよ。メンバーたちにとっても『そんなことできるわけない』とか、『ないならしょうがないな』ってあきらめてしまえば済んでしまう。でもそうじゃなくて、彼らの中に『いや、やりたい』『ボールを蹴ってみたい』『勝負したい』という気持ちがあるのなら、『じゃあ大会やろうよ、つくるってやるよ』っていう姿勢が必要だということを見せたい。それだけなんです。大事な仲間ですから、子どもたち、選手たちにあきらめて欲しくないし、幸せになってもらいたいから。やればできるんだよっていうのを示すことが、大会を開くことの個人的な意義です」

MKB カップでは、チームの表彰とは別に個人の表彰を必ずします。これまできちんと自分のがんばりを評価してもらったことのない子どもにとって、努力して練習したフットサルで個人表彰を受け取る経験が大人への信頼につながるからです。

「フットサルがうまかったってということだけではなくて、チームのためにがんばっていると、それぞれの参加団体に状況を聞いて、表彰する人を選びます。メダルはちょっといいやつをお金出して用意して、個人にあげるようにしています。大会に出て自分ががんばっている。それを誰かが見てくれて、きちんと目に見える形になったという経験が、いつかその子どもたちにとって生きるんじゃないかなと思うんです。自分を大人がちゃんと見てくれた、扱ってくれたって。生まれて初めてメダルもらった女の子が、次の日からその団体の活動に毎日メダルを下げて施設に来てるとか聞くと大会をやってよかったって思います」

初回の大会を経て、子どもたちは「今年はもっと練習したい」と言うようになったそうです。2017年の第2回大会では、子どもたちからの要望で15歳以下の部門が設けられることにもなりました。大会をよいものにしていくことに対して積極的な子どもたちの様子が伺えます。

「私が主催するっていうよりは、みんなでやれたらいいのかな、と思っています」

◆ 広がっていく「居場所」

まきばフリースクールのフットサルプログラム、そして MKB カップは、今後どのように発展していくのでしょうか。「クラブチームみたいにしたいんです。参加費は無料で、活動日が決まっています、試合とか大会も定期的にあって。みんなクラブチームに来て練習しましょう、みたいな。まきばを利用している子じゃなきゃ参加できないということじゃなくて。無料だからっていろんな人がばんばん来て、収集つかなくなっちゃっても困るので、どう枠をつくるかというのは考えなきゃいけないと思うんですけど。まきばの利用者のような、いわゆる苦しい事情を抱えている子ももちろんだけど、それに混じってそうじゃない子も来ていたり、っていうのが、うまくできないかなって思っているんです。もうちょっと枠を取り払って自由に楽しむことが成立すればいいな、と。そういう方向を狙っているんです」

MKB カップは維持しながら、年間を通してリーグ戦が盛り上がっているような状況を東北に作りたいといいます。

「MKB カップを秋にやりながら、同時にリーグ戦をやりたい。練習と練習試合だけだとちょっと物足りないの、リーグ戦みたいな感じで2か月に1回くらい試合をやる。そういう年間を通してのプログラムにできれば面白いと思うんです。それが宮城だけでなく東北全体に広がっていくようなイメージです」

(千葉佳奈子)

09 「ホープフル」な居場所を広げる

野武士ジャパン

野武士ジャパンは、ビッグイシュー基金が行っているスポーツ文化活動のひとつで、ホームレス状態の人が販売する雑誌『ビッグイシュー日本版』の販売者をはじめとしたホームレス当事者や、ボランティアメンバーなどによって構成されるフットサルチームです。ビッグイシュー基金は有限会社ビッグイシュー日本を母体として2007年に創設され、ホームレスの人々が社会復帰できるように様々な支援活動を行っています。その一環としてスポーツ文化活動のプログラムがあり、ダンス、文学、フットサル、野球など、当事者主体のクラブ活動を応援しています。野武士ジャパンは、現在東京と大阪でそれぞれ月2回の練習を行っています。

◆ 「ホープレス」問題にアプローチするスポーツ文化活動

ビッグイシュー基金スタッフとして野武士ジャパンの運営の中心を担っている長谷川さんは、フットサルをはじめとしたスポーツ文化活動はホームレス支援に欠かすことのできない要素だと語ります。なぜならホームレス問題とは、単に住む場所がないということではなく、生きることに“希望”が見出せない状態、つまり「ホープレス」問題だと考えているからです。スポーツ文化活動を通じて当事者が自分の好きなことを楽しめる時間と場所を確保することは、希望をつくり出す第一歩なのです。

「ビッグイシュー基金は、ホームレスの問題を『ホープレス問題』と捉えています。希望をなくした人や、居場所をなくしてしまった人がホームレスになってしまっていると捉えているのです。住居を提供すればホームレス問題が解決するわけではないのです。そういう考えに基づいて、人とのつながりをつくることや、心身面での健康を取り戻すことに力を入れています。スポーツ文化活動を行うのは、人間に必要な基礎として、衣食住だけでなく余暇活動や楽しみを通じて心身の健康を保つことがあるのではないかと考えているからです。単純に、楽しいと人間は頑張れるよね、ということもありますし」

ホームレス状態から抜け出すには、とても長いプロセスが必要です。たとえば路上生活の状態から、生活保護などの社会制度を利用し、住む場所を得て、仕事を探す。しかしすぐに安定した仕事に就けるとは限りません。元々、精神疾患や知的障害を抱えた人も多く、路上生活を脱した後も様々な継続的な支援が必要な場合がほとんどです。野武士ジャパンは、そうした長いプロセスの途上にある様々な人たちに開かれています。

「ホームレス状態といっても、それぞれの方が置かれた状況は様々です。野武士ジャパンは、いま路上生活をしていなくても、生活保護を受けていたり、就職したりしている元ホームレスの人でも参加できます」

実際に、楽しい活動を通じて継続的に人との関係づくりができることが、自立への長いプロセスを支えているようです。

「ホームレス状態で孤立していた人が練習に来て、他の人としゃべって元気になる。2週間に1回でもそうい

う場がある。楽しみに来て、気分転換やストレス発散になる。それに、コミュニティがあるから頑張れるというのは大きいと思います。みんな最近、出欠の連絡をくれるようになったんです。とくに出欠連絡をしなきゃいけないとかは言ってないんですが(笑)。電話で『仕事があるから行けないよ』とか、『ダンスチームの本番があるから行けないけど、今回は行こうと思っている』とか」

このようにフットサルの練習の場は、自立に向けて様々なステップにある人たちにとって、大事な居場所になっています。

◆ フットサルで築く信頼関係がサポートの入り口に

フットサルの場はホームレス状態からの自立を目指すメンバーとビッグイシュー基金のスタッフとの信頼関係が築ける場でもあります。フットサルで「楽しい」時間を共有したスタッフとホームレス当事者は、自然と関係が近くなります。

「僕らも特に専門性を持っているわけではないので、あまり弱者救済のような感じではないです。一般の市民が、一般のおじちゃんやお兄ちゃんをサポートするというような意識ですね。それに、彼らに逆にサポートしてもらうこともあります。私たちの関係性は上下というよりは、横に近いと思います」

こうして築かれた信頼関係は、多様なニーズを発見し、具体的な支援につなげていくための入り口になっています。フットサルの練習時の雑談が、生活相談につながるのです。

「進路相談のようなちょっと重たい話を、雑談ベースで『どうしているの?』と聞けるのはいいですね。サッカーで解決し得ないような本当に難しい問題の場合は、支援の入り口の役割です。例えば、統合失調症がひどくなってしまった人がいた場合、サッカーの場で『幻聴が聞こえるんだ、サッカーやチームメイトの声に集中できない』といったやりとりから発見ができ、別のスタッフが病院につなぐ。そういういい連携が取れています」

ビッグイシュー基金は、事務所で相談を受ける体制も整えています。しかしフットサルの練習ではかしまらずに話ができます。また本人が自覚していないニーズや、普段はみせない意外な一面にスタッフが気づけることもあるといいます。長年のフットサルの仲間でスタッフの長谷川さんだからこそ、信頼して話をしてくれる人もいます。

「事務所に来るのはちょっと勇気が要るけれども、サッカーの場には行けますという人とか、僕の携帯に電話をくれる人とかも多いので、そういったところで意味があると思います。また、スタッフ側からすると、『この人、こんなことを言うんだ』という発見もあります。例えば、事務所にいると、ゆっくりいたらだらしっている人が、練習の場ではすごくリーダーシップを発揮しているとか。『あの、怖いおじさんだと思っていたけれども、実はそんな優しい側面があるんだ』とか。そういう新しい面を知ることで関係性が近くなるということはあるんじゃないでしょうか」

このように野武士ジャパンは、メンバーにとっていつでも気軽に参加でき、単純に楽しい時間を過ごせる憩いの時間でもあり、困ったときは信頼できる仲間からサポートを得られるコミュニティになっています。

◆ ホームレスワールドカップ出場から継続する居場所づくりへ

実は2008年に活動を開始した当初は、少し違った雰囲気だったといいます。それから10年が経ち、様々な試行錯誤の結果、いまの姿に変わってきたのです。

そもそも「野武士ジャパン」というチーム名は、ホームレスワールドカップに出場する日本代表チームの愛称として生まれました。ホームレスワールドカップとは、ホームレス状態にある人たちのために毎年開催されてい

るストリートサッカーの世界大会です。この大会に日本代表は過去三度出場しています。最初の出場は2004年のイェテボリ大会ですが、その後チームの活動は継続されていませんでした。その再スタートに尽力したのが、長谷川さんです。

「2004年の大会を物語にした本を読んだんです。ホームレス支援というと、炊き出しとか、医療のサポートとか、弱い人をサポートするみたいなイメージが強かったんですけど、その本では、ホームレスの人たち同士が喧嘩をしたり、お互いを励ましたり、コミュニケーションをとりながら元気になっていく物語が描かれていたんです。いわゆる支援という枠に当てはまらないけれども、これはとても大切な活動なのじゃないかなと思いました」

もう一度ホームレスワールドカップに日本代表を送り出したいと考えた長谷川さんは、友人にコーチを頼み、ボールや練習着の寄付を募り、チームの活動を再開させます。そして2009年のミラノ大会に8人、2011年のパリ大会に7人の選手を送り出すことができました。

実は、ホームレスワールドカップには一生に一度しか出場できないというルールがあります。なぜなら大会に出場した選手には、それをきっかけにホームレス状態から抜け出し自立してもらうことが大会の主旨だからです。

野武士ジャパンも、代表として送り出した選手たちの「自立」を後押しすることに力を入れていました。実際にほとんどのメンバーが一旦は就職したり、自分の夢に踏み出したりしました。しかし厳しい労働条件の職場だったり、人間関係がうまくいかなかったりという理由で、順風満帆とはいきませんでした。

「ワールドカップの時期は、メンバーに対して、自立の手段としての身分証の取得やコミュニケーションスキルの習得、就職サポートなどを手厚くやっていました。それが結果的にプレッシャーになってしまった。本当は、人それぞれにペースがあるはずなんです。でもそれを当時の自分はわかっていなくて、『他のチームメンバーが頑張っているから、あなたも頑張りなよ』みたいなことを言ってしまっていました」

結果的に思うように自立できず、応援してくれた周囲の期待に応えられなかったと感じたメンバーは、野武士ジャパンの練習に顔を出さなくなってしまいます。

「人に応援してもらえるということが、すごくうれしい反面、焦りになっちゃったというのが、ホームレスワールドカップの学びです。いったん就職はしたけれども、いなくなってしまうメンバーや、また路上生活に戻ってしまうメンバーが結構いたというのが現実でした。練習に復帰したメンバーもいますが、やっぱりはじめは戻りにくそうな顔をしていました」

古くからのメンバーもいつでも戻ってこられる継続的な居場所の必要性を感じた長谷川さんは、大きな方針転換をします。ひとつは、野武士ジャパンの練習の雰囲気を変えることです。それまでは世界大会で戦うことを意識して競技力向上に力点を置いていましたが、誰もが居心地よく参加しやすいように、競技性を緩めてアイスブレイクや話し合いの時間を多く取るようにしたのです。

「いまの練習は、競技性はそんなにないですし、ホームレス状態であることを否定することはしないというスタンスです。いまは、その人をそのまま許容するというか、その人自身が自分のことを受け止められる空間になるようにしたいなと思っています。例えば、あるメンバーは、お金がない中、1時間ぐらいかけて電車を乗り継いでやって来ます。それで遅刻してしまうこともあるのですが、それは数字が読めないとか、知的障がいがあるとか、そういった事情があるからです。以前は遅刻厳禁でやってましたけど、今は遅刻してきても『よく来たね!来てくれただけでOKだよ』という感じですね」

◆ ダイバーシティカップで居場所を広げる

現在は、世界大会出場を一旦保留し、それに代えて国内大会を独自に開いています。それが2015年に開

始されたダイバーシティカップです。ダイバーシティカップは、ホームレス状態だけでなく、うつ病などの精神疾患、知的障がい、ひきこもり、LGBT、児童養護施設出身者など、なんらかの「生きづらさ」を抱えた人たちのためのフットサル大会です。それぞれの困難さは少しずつ違うようで、実は地続きです。このことはホームレス状態に陥ってしまう人のうち、知的障がいや精神疾患を持つ人が少なからずいることからわかります。

社会から排除されやすい、多様な困難を抱える人たちが参加・交流できる野武士ジャパンの練習で培った居心地のよいフットサルの場作りを体験してもらうことが大会の目的のひとつです。

「皆さん基本的に何らかの困難を抱えている人たちが参加しています。『他のフットサル大会とかスポーツ大会だと勇気が必要で出られないけれども、ここだったら参加しやすかったから来ました』と言って、満足して帰る方が多いです。居残りしてミックスゲームをしていく人とか、そのまま食事会に行く人とか、そこから野武士ジャパンの練習に来る人も結構います。大会のリピート率もすごく高いので、そういう意味では、すごく楽しんでもらっているのかな、と思います」

同時に、野武士ジャパンのメンバーにとって日々の練習に張り合いを生む目標を作るという意図もあります。

「春と秋の年2回大会を開いているのも、そういう意図ですね。普段の練習だけだと張り合いがなくなってしまうけれども、大会があるとそれに向けて練習に行こうという意欲が出るので。『今週末の練習は来られないけれど、次回予定している他チームとの合同練習の方は行きます』というような連絡が結構来ます。みんなそういうふうメリハリをつけて参加してくれるようになっていきますね」

大会があることで普段の生活にも張り合いが出るようです。大会という目標があることで、野武士ジャパンが「早く戻ってきたい居場所」になっているのです。

「野武士ジャパンのキャプテンは、この前まで建築現場でバリバリ仕事をしていたんですが、持病の統合失調症がひどくなって入院をしてしまったんです。でもやっぱり大会に出たいからというので、治療を頑張って、大会に間に合うように練習に戻ってきました。それを皆が、自然に受け入れる風土がある。そういう様子を見ると、皆にとっての居場所になってきているのかなと思います」

◆ 多様な参加の形がつくるダイバーシティサッカーコミュニティ

ダイバーシティカップのもう一つの大きな特徴は、選手としてフットサルをプレーする以外にもたくさんの参加の形があることです。ダイバーシティカップに参加するチームのなかには、シャツに刺繍したり、横断幕を作ったりと、大会に向けての趣向を凝らした様々な準備をするところもあります(P.20のFYOなど)。試合の合間にハーフタイムショーでひきこもりの人が歌を演奏したり、全チームのプラカードをホームレス当事者が描いたりもします。

「ボランティアとして得点板係をしてくれる人がいたりとか、ドリンクコーナーで頑張る人がいたりとか、いろいろな参加の仕方皆さん活躍してくれています。70歳過ぎたおじいちゃんが毎回イベントのたびに『道案内するよ』と言って、『次いつよ?』って聞いてくれるんです。よぼよぼでサッカーなんかできないんですけど、イベントのときだけは必ず来てくれる」

普段の練習になかなか来られなくなったボランティアメンバーや昔のスタッフなども、大会本番には駆けつけて手伝います。野武士ジャパンにとってダイバーシティカップは、チームを中心に繋がっている人たちのコミュニティの広がりを確認する場にもなっているのです。

「やっぱり大会のときは露骨に人数増えますね(笑)。普段来なかった人が『久しぶりです』って。ホームレス状態のメンバーだけじゃなくて、ボランティアのメンバーとかも急に増えますね。それでいいと思っています」

そういうときに久しぶりに会えると、お互いに楽しいじゃないですか」

これまで4回の大会を積み重ねてきたことで、チーム間の交流が進んでいます。大会では、アイスブレイクや振り返りの話し合い、ミックスゲームなどを通じて、必ず別チームのメンバーと交流する機会が設けられます。そこで自分とは違う困難を抱えた人と会うことで、視野が広がり、自分の置かれた状況を客観的に見られるようになる効果があります。

「自分だけ苦しいとか、自分だけ社会から追いやられしまったみたいな感覚になってしまうと、他人を責めてしまうことになりかねない。けれど、ダイバーシティカップに参加している他の人が、元気そうに見えるけれどもうつ病だとか、ひきこもりで大変なんだとか、親御さんとコミュニケーションがうまくいっていないんだ、なんていうことを聞いたときに、自分もそういう経験が昔あったんだよね、と共感できる。しかも、そんな人がすごくプレーを頑張っている。それを見て、すごく励まされることがあるようです。どんなに優秀な人でも、実は苦労していることがあるんじゃないですか。そういうことを知れるのは大きいなと思いますね」

大会での交流がきっかけで、普段の練習を合同で行ったり、お互いが主催する別の大会に出るようになったり、ダイバーシティカップの運営にも皆で知恵を出し合ったり、という変化が起きています。チームのコミュニティだけでなく、大会でつながった人たちの大きなコミュニティが形成されはじめているのかもしれない。

「大会で交流する回数を重ねているので、選手同士顔見知りの人が出て、『久しぶりね』とか、そういう言葉を交わす機会が増えています。そういう様子を見ていると、大会を開くことで、野武士ジャパンの活動が発展し、さらに大きな場としてダイバーシティサッカーのコミュニティみたいなものが少しずつ作られてきているのかな、と感じています」

長谷川さんは、今後もダイバーシティカップを通じて、居心地の良いフットサルの場作りを広げていきたいと考えています。

「開催するエリアを広げていきたいと思っています。次の大会は大阪でやることになっています。ビッグイシュー基金のスタッフだけではなかなか難しいのですが、第3回の春の大会に出てくれた人が『大阪でもやりたいです』と手を挙げてくれたのです。そういう形で大会を楽しんでくれた皆さんが、それを自分の地域でもやりたいという形で広がっていったらいいですね」

ダイバーシティサッカーのコミュニティを広げていくことで、ホームレス問題や社会的困難を抱えた人たちの問題を身近に感じてくれる人が増えれば、居心地のよい社会になっていく。それが長谷川さんのビジョンです。

「もう一つは、やっぱり日常に刺激があるといいので、ダイバーシティカップリーグみたいなものが、定例で週末に開かれているとか、ホーム・アンド・アウェー戦で、みんな応援に来てくれるとか。そんなものができたらすごくいい。今Jリーガーの引退年齢も早かったりするので、そういう人が普通にコーチに来てくれたりとか。そういうことが起きると、みんなとても嬉しいと思う。そんなことができると、きっとホームレス問題が難しい問題じゃなくなって、みんなが身近な問題としてもっと気かけたり、関わり方を考えてくれたりするようになると思うんです」

でも決して性急に進めようとはしていません。長谷川さんにとっては、野武士ジャパンをメンバーにとって安心できる居場所として続けていくことが一番大事なことからです。

「人をどんどん入れちゃえばいいという話じゃなくて、安全にチャレンジできる場にしないといけないと思っています。いきなり外部の人をどんどん連れてくると、みんな緊張しちゃいますからね。まずは安心できる場として大会や練習をつくっていくことが大事かなと思います」

(千葉佳奈子)

※第1回&第2回ダイバーシティカップの報告書(PDF版)は、ビッグイシュー基金ホームページにてダウンロードできます。

まとめ
03

居場所を拡張する“晴れ舞台”

まとめ2(P26,27)では、スポーツ活動と居場所の関係について考えました。

居場所は、自分らしいチャレンジに向き合える場で、チャレンジを通じて出会う葛藤が、相互理解をさらに進めてくれます。チャレンジは居場所のなかで出会うものから、外の世界との接点へと展開していきます(まとめ1/P15,16)。ここで紹介した3つの事例は、大会という場づくりをすることで、外の世界との接点でのチャレンジを生み出そうとしています。その意義について考えてみましょう。

3つの事例が支援しようとしているのは、フリースクールに通う若者、精神障がい当事者、ホームレス状態を経験した人と、それぞれ背景は異なりますが、いずれも多くの人が当然視している「ごく普通の社会関係」から切り離されてしまった人たちです。そうした人たちが再び社会関係を取り結んでいくことは、とても大きなチャレンジです。第2部でみたように、そんなときスポーツをきっかけにした居場所は小さなチャレンジを繰り返すチャンスを与えます。そしてその積み重ねが、大きなチャレンジに踏み出す勇気に繋がっていきます。

居場所だけにとどまっていれば、居心地はいいかもしれません。もちろん、そうしたいときにそれを許してくれるからこそ、居場所なのです。でも、より広い世界で自分らしさを発揮できることは、それはそれで素晴らしいことです。多くの場合、それは仕事を得て経済的に自立することを指します。居場所の外に出て、ひとりで生きようとしてみることです。でも良く考えると、いままでより大きなチャレンジをしようとしているのだから、失敗はつきものです。外の世界のチャレンジでうまくいかないときに、いつでも戻ってこられる場所。それも居場所の大切な役割です。

でも往々にして我々は、働いて自立していることが当たり前で、一刻も早く「支援=依存」を離れることがゴールであるかのように考えてしまいます。当事者自身もそのように感じていることが多いようです。でも広い社会につながるプロセスは、行ったり来たり。一直線には進みません。挫折したら居場所に戻ってきて、また挑戦しにしてみる。その繰り返しなのです。

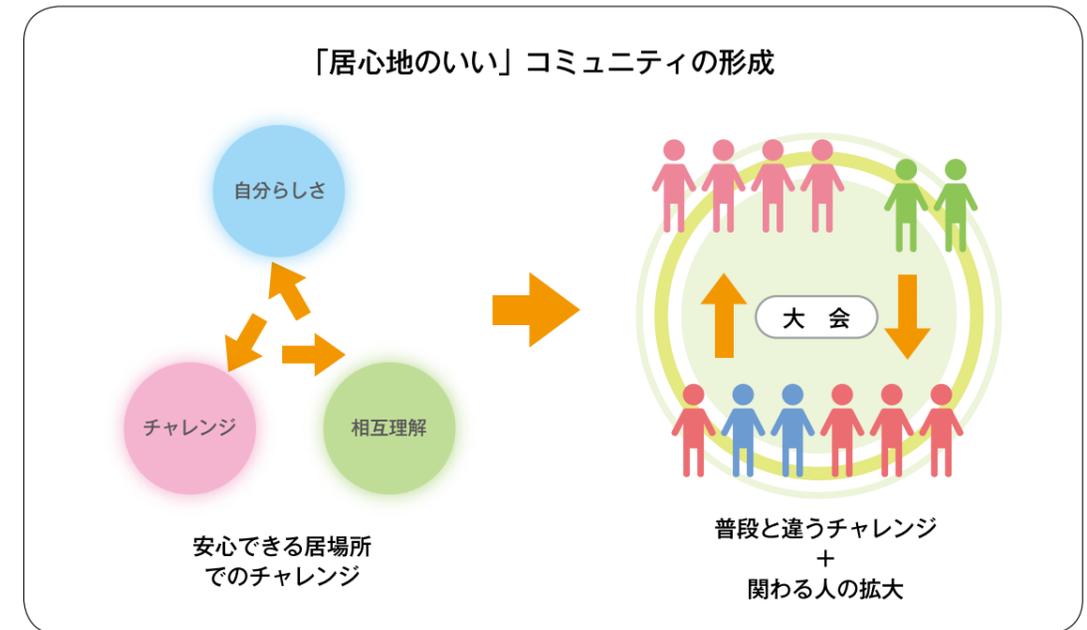
考えてみれば「当たり前」に働いて自立している人たちも、実は家族や友人やご近所さんや趣味の仲間などの社会関係のなかで支えられているものです。そうした社会関係を代替するものとして、このガイドブックでとりあげた事例はスポーツを中心とした居場所づくりをしています。それは第3部で紹介した3事例も同じです。

これらの3事例が特徴的なのは、いつもいられる居場所としてのチームづくりだけでなく、大会という場づくりにも力をいれていることです。なぜでしょうか。

大会は、言ってみれば、“晴れ舞台”です。晴れ舞台では、いつもの居場所でのチャレンジより、もうちょっとだけ背伸びをします。いつもとは違う経験に出会って、自分の可能性を広げていきます。慣れない環境でうまくいったりいかなかったり。その頑張りを承認してもらえる場です。そして次の機会にはどんな挑戦をしてみようかな、と思いを馳せながら、日常に戻っていくのです。次の晴れ舞台を想像しながら過ごせると、いつもの居場所でのチャレンジにも目標ができ、ハリが出てきます。

大会に参加することで出会うチャレンジは、スポーツの場だけにとどまりません。いつもの居場所から遠く離れた開催地に旅をすること自体が、大きなチャレンジでもあります。ここで紹介した3大会は、他のチームや参加者と交流する機会を作ることとても重視しています。人との接点が少なくなってしまう

図3



当事者たちにとって、知らない人と出会い、交流することだけでも大変です。しかし、それぞれに別の困難を抱える当事者同士が交流することは、自分の状況を相対化し、自分自身をよりよく理解することにもつながります。こうして、参加者たちは、ひとまわり大きくなって日常の居場所に戻ることができるのです。

一方、晴れ舞台をつくることは、支援者にとってのチャレンジでもあります。支援者たちが大会開催に向けて四苦八苦している姿から、当事者たちも感じることもあるようです。それに大会を開こうと思えば、支援者だけではできません。当事者も運営側に回り、様々な役割をこなします。一日中裏方でサポートをしたり、企画段階からアイデアを出したり。こうして大会の運営を支援者と当事者が手を携えて乗り切るとき、両者の関係は支援する側とされる側ではなく、いわば同志のようなものになります。普段の居場所での関係も、当然よりフラットなものになり、居場所がもっと居心地よくなります。

また大会という晴れ舞台は、居場所からすこし離れてしまった人たちが戻ってこられる機会でもあります。運営を助けるボランティアの役割がたくさん必要になるので、昔のメンバーやスタッフも手伝いに来てくれるのです。「晴れ舞台で活躍するメンバーを応援したい」というのも、OBOGや家族などが大会に足を運ぶ理由になります。こうして現在のメンバーも昔のメンバーも、それぞれのメンバーに近い人たちも、大会という場を通じて、お互いのつながりを確認することができます。

もちろん、古いつながりを思い出すだけでなく、新しいつながりを生み出すことも、大会の意義です。参加チーム同士が知り合うこともそうですし、ボランティアなどの形で初めて大会に参加する人もいます。より多くの人々が大会という場でつながれるのです(この点は、まとめ4/P49,50でも詳しく扱います)。

つまり、大会を開くことは「居場所の拡張」だといえるでしょう。各参加チームにつながっている人たちがそのコミュニティの広がりを確認できる場でもあり、チームの枠を超えてつながり合い安心できる関係性を広げていく場でもあります。こうして安心して「いつもよりちょっとだけ背伸びできる場所」を、広げているのです。

(鈴木直文)

〈第4部〉「社会全体」に働きかける

10 精神障がい者フットボールのシンボルとして

日本ソーシャルフットボール協会

日本ソーシャルフットボール協会（Japan Social Football Association）（以下、JSFA）は、日本の精神障がい者サッカーやフットサルを推進・振興する全国組織として2013年に設立されました。

①精神疾患・精神障がいのあるなしに関わらず、サッカーとフットサルを通して交流することにより、精神疾患や障がいへの理解を広げること、②フットボールを通じて仲間を作り、生きる力を高め、挑戦する意欲を持ち続けられるような環境を整えること、③精神障がい者フットボールをスポーツの一分野として確立することの3点をミッションとして掲げています。

◆ 全国の精神障がい者にフットボールの楽しさを

JSFAが設立される以前の精神障がい者フットサルは、大阪、埼玉、千葉などの各地でそれぞれ行われていました。精神障がいに携わる医療関係者や研究者が集まる日本スポーツ精神医学会でも、学術総会の後に関係者がフットサル交流会をしていました。しかし精神障がいの当事者たちが地域の枠を越えて、全国的な活動を行うことはありませんでした。

そもそも、精神障がい者のスポーツといえばバレーボールが主流でした。東京都内の精神障がい者支援施設や作業所からなる連合組織、東京都共同作業所連絡会（現一般社団法人精神障がい者地域生活支援とうきょう会議）のスポーツ部会でも、バレーボールを行っていました。JSFAの立ち上げに携わり、現在も理事を務めている徳堂さんは、都内にある精神障がい者支援施設で働かたわら、この部会の委員を担っていました。しかし大のサッカー好きである徳堂さんは、精神障がい者の方にサッカーの楽しさを知って欲しいという思いを持ち続けていたといいます。徳堂さんが日本スポーツ精神医学会のなかで行われるフットサル交流会の存在を知ったのは、そんな折でした。次の学会が東京で開催（2012年9月）されることを聞いた徳堂さんは集会に参加し、フットサル交流会の場で精神障がい者フットボールの全国組織づくりを呼び掛けました。

「初めて学会の先生たちとお会いして、色んなところで精神障がい者フットサルの活動をしているんだったら、全国で繋がってやったほうが面白いんじゃないの、という話をしたんです。自分でつくったプレゼン資料も渡し、『協会をつくりませんか?』と呼びかけたら、皆さん乗り気でふたつ返事で答えてくれました」

賛同者はすぐに集まり、2013年8月にJSFAが設立されました。そして発足から2ヵ月後、東京で開催された全国障がい者スポーツ大会のオープン競技として、精神障がい者フットボール初の全国大会が行われました。当時この大会で、精神障がい者スポーツの正式種目はバレーボールのみでした。

◆ なぜ「ソーシャル」フットボールなのか

ところで「日本ソーシャルフットボール協会」という団体名と精神障がいとの繋がり、一体どのような点に

あるのでしょうか。徳堂さんによれば、由来はイタリアの精神障がい者フットボールにあるといいます。

「実はまだ協会ができる前の2011年に、大阪の精神障がい者フットサルのチームと、後にJSFAの設立に携わることとなった精神科医の医師たちが、イタリアに遠征に行っていたんです。イタリアの精神科医療はすごく進んでいると言われていて、医師同士に親交があったんです」

そこで出会ったのが「calciosociale（カルチオンチャレ）」という言葉でした。この言葉は、イタリアのサッカー文化を表す言葉として使われており、英語に直すと「social football」。イタリアでは、障がい者に限らず、移民・人種差別・経済格差・薬物依存・家庭や教育など、社会が抱える諸問題をカルチオ（calcio＝イタリア語で「サッカー」の意）を通じた社会的連帯によって解決しようとする文化が根付いているそうです。それを総称して「calciosociale」と呼ぶのです。サッカーを通じてあらゆるマイノリティを包摂し共生することを目指す「calciosociale」というコンセプトは、徳堂さんたちが当時描いていた理念や目標と通じるものがあると感じたといいます。

「協会名にするには分かりにくいんじゃないか、『精神障がい者サッカー協会』とか『連盟』とかの方がいいのではない、という議論はありました。でも私たちが目指しているのは、精神障がい者だけでなく色んな人たちが一緒にサッカーを通じて分かり合う世界です。それで『日本ソーシャルフットボール協会』という名前を付けました」

精神障がい者フットボールの普及や振興に努めるだけでなく、自分たちの活動を誰もがより「生きやすい」と感じる社会をつくることに繋がりたい。それが「日本ソーシャルフットボール協会」という名前に込められた、JSFAの思いなのです。

◆ 「シンボル」としての大会が輪を広げる

フットサルは、精神障がい者スポーツの主流であるバレーボールや卓球に比べ、接触プレーのある激しいスポーツというイメージがあり、実際に怪我の危険性も高いため、精神科の領域では積極的に行われていませんでした。しかしJSFA設立以後、精神障がい者フットボールは順調に成長しています。2016年には、他の6つの障がい者サッカー協会（切断障がい、脳性麻痺、知的障がい、視覚障がい、聴覚障がい、電動車椅子）とともに、一般社団法人日本障がい者サッカー連盟を設立します。精神障がい者フットボールの競技人口は、7団体の中で最も急激に増えているといいます。

徳堂さんは、こうしてできた繋がり輪をより広げてゆくために、大会という場がますます重要になってくると考えています。

「いまは日本国内で繋がることを目指している段階ですが、将来的には世界と繋がりたいという思いがあります。大会があると一般の方をボランティアで募ったり、企業の方にもCSRという形で関わってもらえたり、色々なところで繋がりがやすいと思うんです。いまはまだ精神障がいと聞いても、それがどういう障がいなのか知らない人が多いはずですから」

精神障がいの実態がわからなければ、どう関わったらよいかもわかりません。大会の運営に協力することを入りにすれば、精神障がいに対する社会的な認知を広げていくことができます。社会的に認知されやすい場として大会があることは、精神障がい者フットボールをプレーする当事者のやる気にもつながります。

「日本障がい者サッカー連盟で、それぞれの障がい者サッカーの日本代表選手が着る統一のユニフォームを作りました。『大会で活躍して日本代表になりたい』『全国大会に出たい』というように、目標があると人は頑張れると思うんです。私たちはもともと『自分たちはただの大会屋さんではない』と言ってきたんですが、シンボリックな大会はやはり必要だと考えています。いま協会には『自分の住んでいるところの近くにチームはある

か』とか『どうすればチームをつくることができるか』といった問い合わせが多数来ています。彼らもシンボルとなる大会があったから、精神障がい者フットボールを知ることができたんだと思うんです」

◆ 精神障がいから「卒業」して歩み出すために

精神障がい者フットボールは「障がい者サッカー」のひとつに位置付けられていますが、徳堂さんは、精神障がいは他の障がいと比べると少し特殊なところがあるのではないかといいます。

「精神障がいは、『障がい』ではあるのですが、同時に『疾病』でもあるといわれています。基本的には精神科の診断基準に従って、統合失調症やうつ・双極性障がいなどの方が対象となります。しかしフットサルをやっていくうちにどんどん回復して、精神障がいの症状がなくなる方も出てきます」

精神障がいと身体障がいや知的障がいと最も異なるのは、薬やりハビリによって症状がなくなる可能性を持っているという点です。障がい者でありながら、障がい者ではなくなる可能性があることは、障がい者と「健常者」との区別をどう判断するかを難しくしているのです。しかし徳堂さんは、精神障がい者としてフットサルを始めた選手が、体を動かすことによって元気になり、障がいを克服することはむしろ理想的であるといえます。

「最初は精神障がいのある人という括りでソーシャルフットボールの大会に出場するようになったけれども、病気が回復して『卒業』していくことはあっていいことだと思うんです。何かをきっかけに障がいが再発する可能性は常にありますが、薬を飲まずに生活を送ることができるようになっていけば、あえて『障がい者』という枠にとどまる必要はないと思うのです。かつて精神障がいを患っていたとしても、今は精神障がいに理解のある人ということでもいいんじゃないでしょうか」

精神障がいの場合、孤立してしまっているときほど症状の再発や悪化が起こりやすいといわれます。妄想がひどくなったり悲観的な感情が強くなったりし、「自分は社会から取り残されてしまっているのではないか」という感覚に苛まれてしまうといえます。現在 JSFA に登録している精神障がい者フットサルのチームは 130 以上もありますが、全国にはチームを一つも持たない県もあります。JSFA がフットボールを届けたい精神障がいの当事者は、まだたくさんいるということです。

「当事者の方が病院の外へ出た時、生活の中で何か潤いをもたらしてくれるもの、そういうものの中にスポーツがあったらいいと思うんです。それが症状の回復や、生活の維持に繋がる要素だというふうに、私たちは確信しています」

(栗栖由喜)

11 誰もが誰かのセーフティネット

daimon

daimon は、2012 年より、沖縄のお母さんのためのフットサル大会「ダイモンカップ」を主催しています。代表理事である糸数温子さんは、スポーツや余暇活動を通して「みんなが参画できる社会」をつくることを目指しています。ダイモンカップを中心に地域のコミュニティづくりや県内の NPO 活動団体と連携し、子どもの貧困をはじめ幅広い社会課題に取り組むためのネットワークングを行っています。

◆ 子どもの貧困を断ち切るためにお母さんの社会的孤立を防ぐ

糸数さんが daimon を立ち上げたのは、大学院で子どもの教育格差について研究をしていた頃でした。子どもの教育格差は、家庭の貧困状態や経済格差の影響が大きな原因だと考えられています。したがって子どもの教育格差にアプローチするためには、子どもたちが育つ家庭そのものにアプローチすることが必要だと考えていたといえます。その端緒が「お母さんたち」でした。

「子どもに直接1000万円あげても子ども自身の人生は変わらない。家族丸ごと支えないと彼らの進路決定ってなかなか変えることができないんです。家族という単位に視点を移して考えたとき、そのなかで最も社会的な資本から孤立しやすくなっているのはお母さんです。それならお母さんに焦点をあてて、お母さん同士の口コミで社会的サポートの情報共有をできるような仕組みを作ってはどうか。子どもや家庭の貧困に対する支援の捕捉率を上げるために、1人ひとりがハブになって、1人ひとりのセーフティネットを整えていく方法があるんじゃないか。そういうことを考えていました」

糸数さんがいう「社会的な資本」とは、様々な人のつながりから得られる有形無形のサポートのことを指します。お母さんたちは家庭で子どもに接する時間が長い一方で、家庭外の社会関係から孤立しがちになります。お母さんたちの社会的孤立を防ぐことで、家庭の貧困と子どもの教育格差の悪循環を断ち切る糸口が見つかるのではないかと。お母さん同士のつながりをつくり家庭の外のネットワークにつなぐことで、お互いに助け合ったり、必要な支援を提供できる企業や団体などにつながりやすくなる。そんな仕組みが必要だと考えたのです。

◆ 社会的ミッションを表に出さずに、ひとびとの「参画」を引き出す

しかし大学院で研究をして論文を書くだけでは、限られた人にしか届かない。それが歯痒かったといえます。「子どもの貧困や教育格差の問題って、当事者支援や当事者に近い人でない限り、自分たちとは無関係のことのように過ぎてしまっている。私が修士論文を書いたとしても、そういう問題に関心が薄い人たちには読んでもらえない。一緒に参加して取り組んでほしいのに、そこには届いていないということを感じていました。ではどうやったら巻き込むことができるのか。よくあるセミナーや勉強会ではない新しい形が必要だと思いました。貧困などの問題に取り組むという意識を持っていなくても、無意識に参加してしまうような仕掛けが欲

しかったんです」

普段、子どもの貧困や教育格差などの社会問題を自分ごととして意識していない人たちに、堅苦しくない形でアプローチできる社会的な巻き込みの新しい形。それが「お母さんのためのフットサル大会」でした。

2012年、第1回ダイモンカップを開催します。キャッチコピーは「応援×感謝の見える場所づくり」。いつもと違うお母さんたちの笑顔に応援しようというものでした。貧困、教育、支援、社会、チャリティ…といった堅苦しいキーワードは、あえて表に出さないのがポイントです。

「社会的なミッションなどはお客さんには言わない、っていうことをずっと徹底していました。意識させて何かをしてもらうんじゃなくて、無意識のうちにさせられてたっていうのをどうやって作るかを考えました。参加者も貧困家庭に限るとかそういうことは全く考えていません。沖縄で既に活動しているお母さんチームやいつか子どもを持つかもしれない若い層を対象に、『お母さんのためのフットサル大会ですよ』『日本で一番楽しい大会ですよ』『この大会に来るとお得ですよ、面白いですよ』ということを感じてもらえる。そういう仕掛けをたくさんつくりました。『この大会に来てくれたら、お父さんもお母さんも子どもも友達も兄弟もみんな一緒に楽しいことができますよ』ということだけをアピールし続けたんです」

お母さんたちが家事や子育ての心配なくフットサルを楽しめるように、ダイモンカップは子どもたちを見守る役目を担うみんなを楽しませる工夫をしています。ノンアルコールビールを配ったり、屋台を出したり、フェスのようにDJブースを設けたり、酸素カプセルを設置したり。大会に来られない家族にもその日の楽しさを味わってもらうために、ユーストリームやYouTubeで大会の様子を一日中配信したりもします。

初年度である2012年の来場者数はおよそ500人。お客さんを集めるにあたってこだわっているのが「ロコミ」です。フットサルをしにくるお母さんが子どもを連れてくる。そうするとお母さんがプレーしているときに子どもをみてる人も一緒にくる。プレーヤー1人が3人に膨れ上がります。1チーム10人で14チーム呼べば400人を超え、運営に関わる人数を含めれば500人になる。そういう周到な計算に基づいていたと言います。

「コンセプトは全部同じです。あなたと一緒に何か楽しいことをやりたい、行きたい。誰かとじゃなくてあなたと一緒にいきたい。それを徹底しています」

その後もロコミの力で大会規模は順調に拡大し、2013年が1500人、2014年が3500人、2015年と2016年が2000人と毎年活況を呈しています。最初の5年でのべ約1万人がダイモンカップを楽しんだこととなります。規模が大きくなっても、選手として参加しているのは350人程度に過ぎません。残りの人たちは何らかの別の参加理由をダイモンカップに見出していることとなります。

◆ サッカー大会にお米だけ持ってくるおじいちゃん

ダイモンカップで多くの人を集めようとするのは、参画の文化をつくり、多様なアクターの協働を促すためです。「私は当初から、大会は花火だと言ってきました。そこで社会的な注目を集めて、他の活動につなげていきたいからです。」

ダイモンカップを開催すること自体が、多様なアクターの協働によって成り立っています。「誰もが楽しめる大会」を作り上げていくことができるのは、新聞やラジオなどのメディアをはじめとした沖縄の地元企業、貧困問題に取り組むNPO法人など、数々の協賛企業や協力団体の力を借りているからでもあります。

連携のひとつの例として、「フードドライブ」という食糧寄付を集める取り組みがあります。大会の参加者に今年の持ち物と称して「お米を1カップ持ってきてください」と呼びかけます。そこで集まったお米は、連携する「NPO法人フードバンクセカンドハーベスト沖縄」を通じて沖縄県内の生活困窮世帯に届けているのです。これは同時にフードバンクという取り組みの存在を、大会参加者に知ってもらう機会にもなっています。2014年はお米が

1007カップ集まりました。取り組みが定着してきた現在では、会場にお米を持ってきて帰るだけの方もいるとい

います。「お米だけ持ってきてくれるお母さんもいます。『サッカーしないし、サッカーできないけど。なんか駐車場めっちゃ混んでるから』って言って、『米はい!』って持ってきて帰るおばさんがいたりするんですよ。あと、ラジオで聞いて車に米とか本積んできたから降ろして、みたいなおじいちゃんとか。で、帰る。笑」

2015年には、子どもの居場所づくりのために「本棚を作りたい」と漫画本の寄贈を募り、2日間で900冊を集めました。ダイモンカップに来ると知らないうちに「参画」させられている。それが社会参画の「文化」づくりに繋がると糸数さんは考えています。

『『今年はお米持ってきてくださいねー!』とだけ伝えて、持ってきてくれると、そこで初めて何に使うんですかっていうのを説明するリーフレットをお土産として渡すわけですよ。『実はフードバンクを通じて、沖縄の生活保護世帯の方に届けてます』って。そこではじめて自分が今した行動に対して『ああ、そうなるんだ』って理解して意味や価値を持つようになる。そうやって今すでに活動している団体への繋がり方を私達がちゃんと用意して伝えることで、大会以降に各支援団体に定期的なボランティアとして参加された方とかも結構出てきています」

誰かに言われたからではなく、やるのが普通だから、ただやる。それが「文化」だと言います。

「文化を作るってことは、説得したらダメじゃないですか。だって、家に入るときに靴脱ぐのは誰かに説得されたんじゃないって、自分自身がそうしないと嫌だからですよ。っていうくらい、『ダイモンカップ今年は何持っていいわけ?』くらいの、ノリにしないと」

◆ チームスポーツは社会の鏡

しかしなぜフットサルというスポーツが、社会課題解決のハブになると考えたのでしょうか。ひとつは、フットサルをプレーするときは、肩書きやその人の置かれた状況が問われることがなく、完全に平等であることを感じられるからだと言います。つまり、人はそもそも平等なのだということに、気づくことができるのです。スポーツの場での勝ち負けが、日常に持ち込まれることもありません。

「私が、大学院生だとか社長とか大学の先生といった肩書きを持っているからといって、本当はフリーターをやっている友達と差があるわけじゃない。ピッチの中では、そんな肩書きなんか忘れて平等になれる。お医者さんでも、ホームレスでも、ピッチの中では関係ないじゃないですか。上手いか上手くないかだって、大した意味を持たないですよ。『今日うまかったね!よかったよ!』『今日は楽しかったよ!ありがとう!』って、スポーツの世界で完結できるから。肩書きが一步外に出た時に問われることがないということに可能性を感じています。」

自分ひとりではできないチームスポーツでは、人とのつながりを実感できる場面が多いことも重要だったと言います。実際の社会でも、お互いがお互いを頼りにし合ったり、それを言葉にして伝え合うことを通じて、自分らしさを保つことができるものです。

「一人でやるチャレンジって中々続かない。ダイモンカップの運営も、誰かと一緒だからやれるんです。『イベントするんだけど手伝ってよ!』って、人に声かけてもらえると、『今日、声かけしてくれたのが嬉しかったよ』というようなコミュニケーションを通して、人に大切にされていることや、自分がそこにいて人の役に立てているんだっていう自己肯定感や安心感が湧いてきますよね。フットサルだったら、5人いれば、そこで邪魔な人はいない。1人でも欠けたら試合にも出られない。最悪、いるだけでいい。そこにいるだけで試合も成り立つし、今日来てくれただけでサンキューみたいな日もあるじゃないですか。『あ、今日4人しかいないから試合出られないかと思った』みたいに。そこまでいったら、一人来てくれるだけでラッキーじゃないですか。いてくれるだけいいみたいな、そんなメッセージが発信できるもの他にないですよ、きっと。1人ひとりがセーフティネットつ

〈第4部〉「社会全体」に働きかける

てそういうことじゃないかな。」

自分ひとりで努力するだけでなく、チームの仲間がいてこそ自分の自分なのだという気づきや、自分がいてこそチームなのだという実感が得られることも、チームスポーツの良さです。

「自分が努力することによって自分自身を高めることはできます。でもフットサルでは自分ひとりが努力したところで勝てない。私がやっているゴールキーパーなんて最たるもので、仲間に点を入れてもらわないといけな。そもそもメンバーが足りなければ大会に参加すらできないし、コートがなかったら大会もできない。一人でやれることって、とても限られています。自分自身が自立して自らの努力でパワーアップすることも大事ですが、誰かが一緒にやってくれるということももっと大事だと思う。フットサルで誰かが私にいいパスをくれたら、自分が苦しい時にサポートするプレーをしてくれたら『ありがとう!』ってなる訳じゃないですか。試合後に振り返って、自分たちがいかに協力ができたか、自分がこのチームにいかに関与できたか、っていうことを感じられると、達成感が湧きますよね。」

◆ フットサルが育てるセーフティネット

お母さんのためのフットサル大会を毎年開催してきた成果が、普段の生活の場面でのセーフティネットにつながってきている。そういう実感を少しずつ得られるようになってきているようです。

「本島のお母さんチームと一緒に石垣島に行って来たときに、『あれただのフットサル大会じゃなかったんでしょ?なんか、私たちに出来ることないの?』って、飲み会で言われたんです。ちょっと変わって来たって、そのとき実感しました。そういうお母さんたちを、『仕事のシフトで昼間休みになった日でもいいので』って子どもたちの練習会に誘ってるんですよ。そうしたら、結構参加してくれるようになってきて、『休みの日だったらいいよ』って。そうやって参加してくれる場が今増えていて、有機的にお母さんたちとの繋がりがっていうのも出来てきているのかな、って思ってます。支援をするために、じゃなくてフットサルの相手をしに来ただけなのがいいんです」

参画の文化が根付いてきたことを感じている糸数さんは、2017年のダイモンカップをいままでとは違う形で開催しました。沖縄国際通りを舞台に、ウォーキングサッカー、車椅子サッカー、バブルサッカー、フリースタイルサッカーなどを織り交ぜ、また対話を重視したトークセッションを企画したのです。これまで参加者が「知らないうちにやらされていた」社会貢献を、今度はより意識的に具体的な連携の形へとつなげていくための挑戦でした。

「これまで私達は、あえてスポーツイベントとして観られるっていうことをやってきました。『何かスポーツイベントで社会貢献する変わったイベントでしょ?』みたいな位置付けだったんです。それを、企業さんたちに対しても、行政の人たちに対しても、『もっとやれることあるから、一緒にやろうよ』っていうのをこの3日間で深めようというのがテーマなんです。1日目は、彼らにチームを作って参加してもらって、スポーツでできる社会貢献を実感してもらおう。じゃあ、これまでのお母さんたちは、ほっとくのかっていうとそうじゃなくて、もちろんお母さんたちにも一緒に参加してもらおう機会を作って、ダイモンカップは次のステージに行こうとしているんだなって実感してもらいたい。2日目は、トークセッションで対話を深めることで、これまで可視化されてこなかった「つながり」を再確認する。3日目は沖縄のメインストリート国際通りを占拠して一般の人にも驚くような形で発信する。そんな3日間のプログラムになっています」

毎年大会を通じて、少しずつ人と人の繋がりを育ててきたからこそ、新しいチャレンジに踏み出せるようになったのです。

「もちろん、それは1年だけではできなかったことだし、2年目でも出来なかったことだと思うし、徐々に徐々に、『ああ、なんかダイモンカップは普通のフットサル大会と違うんでしょ?』っていうのを浸透させることができて、どんどんどんどん、お客さんと一緒に成長してきた感じがあります。いまではみんなに言われますよ。『ダイモンカップでは何かを持ってくるようになってどうせ言われるんでしょ?』って。笑」

(逢坂仁葵)

まとめ

04

社会を居心地よくする“花火”

第3部に続いて第4部でも、大会という場づくりをしている2団体を取り上げました。といっても、第3部で取り上げた「居場所の拡張」としての大会とは、少し趣きが違うと感じられるかもしれません。日本ソーシャルフットボール協会とダイモンカップ。この2つは、大会という場をより広い対象に向けて発信する場として位置づけている側面が大きいからです。

第3部の3大会が普段それぞれの「居場所」で接している当事者を一番の受益者として念頭に置いているのに対して、日本ソーシャルフットボール協会やダイモンカップは大会という場づくりに特化しています。とはいえ、実は連続性もあります。この2大会は、いわば社会全体をより居心地の良い居場所に近づけようとしていると考えられるからです。

図4

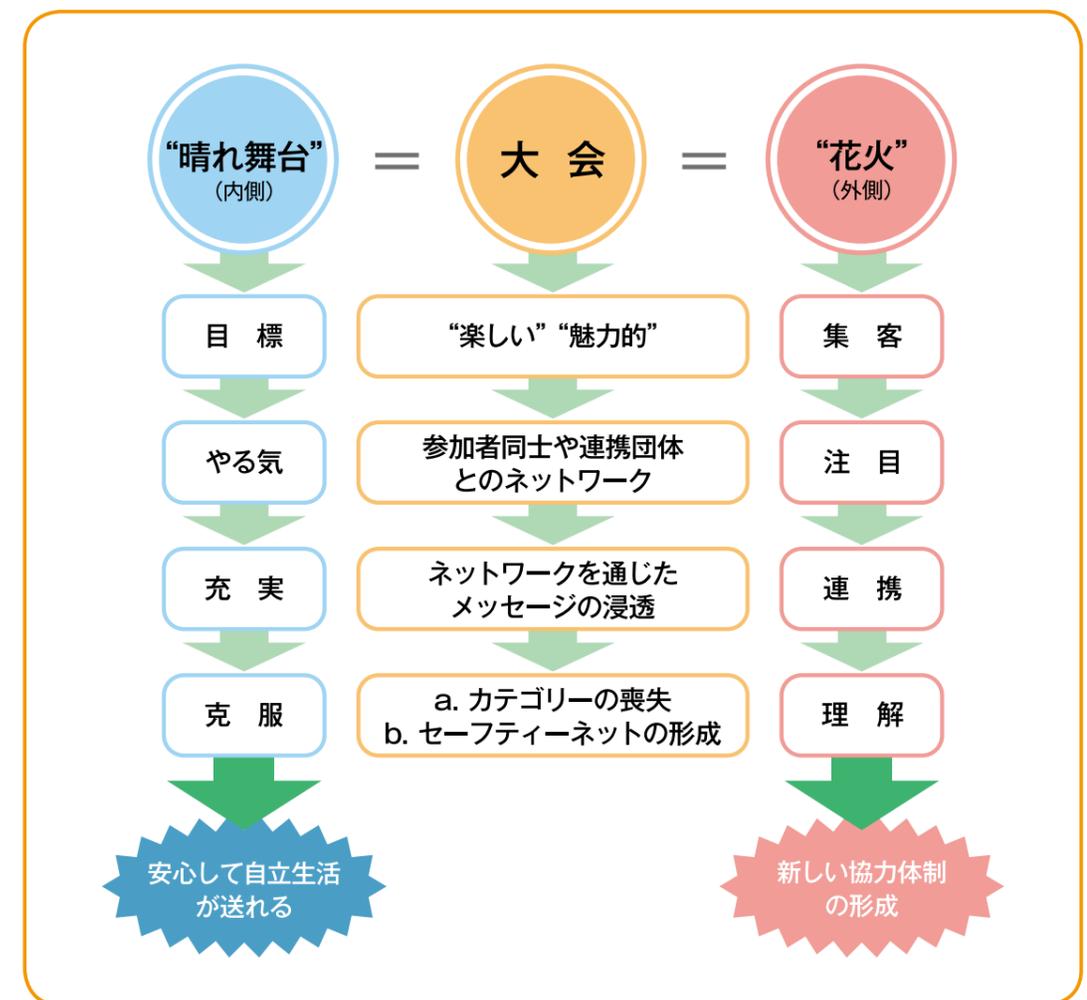


図4は「魅力ある大会づくり」をきっかけに、どのようにして社会を居心地よくしていくのかを模式的に示したものです。大会は、困難を抱える当事者たちの“晴れ舞台”（まとめ3/P40,41）であると同時に、広く社会の注目を引きつけるための“花火”でもあります。いずれの目的のためにも「大会を魅力的にする」ということが、大きな意味を持ちます。

“晴れ舞台”とは、参加する当事者にとってより輝いている舞台にしていくことです。日本ソーシャルフットボール協会が、全国大会をつくり、他の障がい者フットボール団体と連携して「日本代表」というブランドをつくらうとすることが、その好例です。ダイモンカップも「お母さんたち」にとって魅力的な場づくりにするために、家族みんなで楽しめる場所にすることを徹底していました。

同時に参加者以外の人たちにアピールする魅力をつくるという側面もあります。これが“花火”です。日本ソーシャルフットボール協会が全国大会や日本代表にこだわるのは、それらのキーワードに話題性があり関心を集めやすいからでもあります。ダイモンカップは核になるお母さんたちとその家族をたくさん集めるためのコンテンツを、たくさんの連携団体を通じて用意しています。大会の規模が大きくなれば、協力企業にとってより魅力ある広告媒体になっていきます。

晴れ舞台としての大会が当事者に及ぼす好影響は、まとめ3（P40,41）でも触れました。簡単に振り返ると、晴れ舞台に向けて目標をもって過ごすことが日々の練習へのやる気、そして生活の充実につながり、抱えた困難を乗り越えることにつながっていくのです。一方、花火としての大会は、次のような効果を生みます。集客力のある大会はメディアや企業の注目をあつめ、大会運営の場面での連携を生みます。そうした協働が当事者たちの抱える困難に対する非当事者からの理解を促し、広い社会的な認知につながっていきます。

そのような変化を起こすうえで、大会の場でのコミュニケーションの設計が鍵を握ります。様々な社会的困難が存在していることを周知することは重要ですが、そうした課題から離れられることがスポーツのよさです。フットサルでは、誰がなんらかの困難を抱えた当事者かとか、誰がどういう社会的地位にあるのかといったことは問われません。そうした垣根の低さが、より多くの人が集まれる要因なのです。そうしたフラットな関係性のなかに、当事者と協力者双方に対して、押し付けがましくない形でメッセージを感じ取ってもらう工夫がポイントになります。大会の場でつくれるネットワークを通じて、自然とメッセージが浸透していくことを狙うのです。

それには社会課題が解決していくことに資する、二つの意味があります。ひとつは相互理解のネットワークが形成されることで、当事者にとってのセーフティネットが何重にも張り巡らされることです。当事者同士の助け合いや口コミ、必要な支援への接続、さらには多様なセクターが連携した支援体制の形成を促すことが可能です。もうひとつは、困難を抱える当事者への特定のカテゴリーの押し付けがなくなり、相対化されることです。医者も精神障がい者も同じ。社長もフリーターも同じ。ソーシャルフットボールへの参加資格がなくなるエピソードは、カテゴリーの消失を象徴しています。本来「社会課題」は課題ではなく、社会に溶け込んでしまうことができるのかもしれません。

大会を通じてつくれるセーフティネットやカテゴリーに囚われない社会認識の広がりや、当事者が安心して自立生活に向かっていくことを後押しします。同時に大会を離れた場での多様なアクターの協力体制づくりへと広がっていくことが理想です。晴れ舞台であり花火である大会はあくまで非日常の場面なのであり、本当の狙いは日常の社会がより居心地のよいものに変化していくことなのです。

（鈴木直文）

対談

鈴木直文
×
井上英之

スポーツを通じた社会的包摂の可能性

ガイドブックをまとめた鈴木直文さんと、社会起業家の育成輩出に取り組んできた井上英之さんに、これまで紹介された事例と、ご自身の体験をもとに、「スポーツを通じた社会的包摂の可能性」についてお話を聞きました。

井上 私はダイバーシティカップ（P37）の1回目に参加しているんです。最初は、応援で見に行ったのですが大会の雰囲気なんか気持ち良くて、気づいたらユニホームを着て一緒にプレーをしていました（笑）。実は、21世紀に入ってはじめてのフットサルのプレーだったんです。ホームレスサッカーチーム「野武士ジャパン（P35）」のメンバーと一緒に必死にボールを追いかけ、そして、パスが通ったとき、見えない繋がりがつなげたようで、不思議な感動がありました。初めて出会った人たちがとても大切に思えてくる。頭で考えていることでいっぱい毎日、いつの間にか遠ざかってしまった繋がりが居場所や浮かび上がってくるようでした。

鈴木 私もダイバーシティカップに関わらせていただいて、すごく可能性を秘めた場だと感じています。「勝つこと」と「楽しむこと」の絶妙なバランスをどう保つのかという実験をしている。勝ちたくてムキになったり、でもうまくいかななくてイライラしたり、それをチームで乗り越えようと努力したり、「点とれてよかった!」「勝って嬉しかった!」という素直な感情を発散しながら、「勝てないからつまらない」には決してならない。勝つことと楽しさが両立していて、むしろチャレンジの中にたくさんの楽しさが詰まっている。スポーツはついつい結果ばかりを見てしまうのですが、勝っても負けてもみんなでチャレンジした楽しさの価値は変わらないんですね。井上さんの感想にも似た部分を感じますね。

井上 そうですね。じつは隣のフットサルコートでプレーしている人たちもいたんですが、私たちより断然上手なのに、ちっとも楽しそうじゃなかった。いかにも強そうなチームが、対戦相手をけちよんけちよんにしていた。何だか、対戦相手は敵でしかなくて、顔が見えるとか関係ない感じで、負けているチームも下を向いて。なんだろう、チームなのに、どちらも個々は疎外感を感じているように見えました。負けたチームだって、私たちより上手で、ずっとフットサルらしいプレーしているのに。「わ、何だかやだな」って。

鈴木 スポーツは仲間づくりや「社会的包摂（インクルージョン）」に役に立つと言われているんですが、気をつけないと「仲間はずれ」や排除の方向に作用することがあります。インクルージョンにスポーツを活かすには、そこを運営する人や参加者が目に見えない機微を理解しておく必要があります。

井上 機微というと作法のようなことですか？ 話していて思い出したんですが小学生のころに草野球チームをやめたんです。野球そのものが嫌だったというより、日本のスポーツの決まりごととか、型にはまったフォーマットが嫌だったんです。なぜ先輩・後輩の上下関係が大事で補欠は球拾いをするのが、ボールを取る技術を磨くよりも声出せと言われるのか不思議だった。理由をきくと怒られて、いいからまずいう通りにしろとか言われるんです。昔からそうだからとか、前提を疑うことをしなくなっている。世の中でこれだけの変化があって、前提から検証して、本質を見つけなおして前に進まないといけない時代なのに、日本のスポーツ界では古いマネジメントも多いですね。

鈴木 ここ数年、既存のシステムの中で生きづらいと思っている人が増えていますよね。今回、ダイバーシティカップを含む11団体を調査したのですが、参加者の多くは「社会的弱者」と呼ばれていることが多い人たちです。でももしかすると彼らは、人より感度が優れているだけかもしれない。既存の学校や社会の綻びを敏感に感じとってしまった人たちとも見ることができそうな気がするのです。だから彼らの感度を活かすことが、みんなが生きやすい共生社会への近道かもしれません。今回の調査でインタビューした中に「スポーツは共生社会への実験場」と言う人がいました。フットサルの場では誰がホームレスで、誰が学校の先生といった立場がなく、あくまで一人ひとりの

名前のある人ですね。井上さんの言葉を借りれば、「ボールを夢中で追いかけて、見えない繋がりが見えて、息が合っ
てパスを通った相手」ということになります。一緒に汗を流し尊い体験を共有した相手と思えた瞬間、相手への感
じ方や見え方が変わってきます。

井上 フットサルをやってみると、肩書きなんかなくても、その人が伝わってくる。ホームレスとかひきこもりとか、
そういうことより、彼の笑顔がいい!とか、すごい走れるとか、攻めるとき上がるのが早いとか、その人の熱さとか
一生懸命さとか。その人の中にひそむ、それぞれの多様性が見えてきますよね。今、明らかに、多くの人が会社と
か働くとか、職場のことを言う時に必ず“皮肉”の色が見える。「就職よかったね!」って、すっきりとは言いにくい
感じがつかまとう。「働く」ということにとこか皮肉やあきらめがある。会社だけでなく、政治とか、選挙とか、自
分たちの町のこととか、色んなことがそう。これまでの社会制度や当たり前とされてきたやり方が限界にきている。
本当にみんながこうありたいと感じていることと、これまでのやり方に明らかにズレがある。世の中や、一人ひとりに、
今何が起きているのか、ということに気づかないといけない。今、一人ひとりがどういう状態で、何を感じているの
かに気づくことから始めないといけない。

鈴木 なるほど。社会制度や当たり前とされていることが限界にきているのに、それに合わせて生きようとしたら、
それは生きづらいですね。きっと「こうしなきゃいけないのに、できない」みたいな感じ方って、思い込まされて
いるだけなんですね。この本書にはひきこもりや依存症など色んな問題に悩まされている人たちが登場しますが、
「そこにはいけない」っていう当人たちの規範意識が、逆に問題から抜け出すことを難しくしているように思
います。そういう意味でスポーツは、体や心が元気になることはもちろん、自分の知っている世界の一步外にでて、自
分の思い込みを相対化し価値観を広げてくれる可能性があります。第1部のまとめで書いた階段上の図(P15)がそ
のイメージです。この図は病気や依存症に限らず、多くの人に当てはまるものです。

井上 スポーツの競技性だけでなく、本来もっている素晴らしさをこのガイドブックでは紹介しようとしています
よね。スポーツの使い方を変えるとこんな意味がある。それぞれの事例紹介のあと、各部の最後で、先ほどの機微
や、作法にも通じるようなエッセンスを見事にまとめていますよね。

鈴木 第2部では居場所、つまり、自分らしくいられる場所をもつことの意味を紹介しています。インタビューを
してみて感じたのは、居場所ってただそこに居られるっていう意味に止まらないんです。自分らしい何かにチャレ
ンジすることを、無条件で承認してもらえる場所なんですね。自分がやりたいことをやっていくと、人との関係ができる。
同時にうまくいかないことにも遭遇するんですが、自分のやりたいことだから乗り越えたいと思える。スポーツをや
りたいっていても、いわゆる体育会系のノリでやりたいわけじゃない。だけど、周りの人はそういうスポーツしか
知らないかもしれない。そうしたら「そうじゃない。僕はもっとこういう雰囲気です。やりたいんだ」って、主張するわ
けです。そうやって葛藤を乗り越えると、周囲との相互理解が一層深まるので、もっと居心地のいい場所になっていく。
そういうサイクルが作られているんです。これも困難を抱えた当事者だけでなく、多くの人に当てはまることだと思
います。

第3部では、大会を開くことで居場所の機能を広げていくプロセスを説明しています。大会は不慣れな場なので、
普段よりちょっとハードルがあがります。それがいいところ。そこで普段できない失敗をしたりして、またいつ
もの居場所にもどって今度はそこに目線を置いてチャレンジができるようになる。また、継続的に大会を開催すると
参加団体との繋がりが深まり、段々と顔が見える相手が増えていきます。そして繋がった団体同士で、居心地のい
いコミュニティを大会の内外で一緒に育てていくようになります。安心してチャレンジできて、相互理解を深められ
る居場所的な性格の場が大きく広がるわけです。

井上 居場所を外にも広げていくことは大切ですね。自分と繋がりがながら、外部とも繋がっていく。一定の安心
感を持ちながら、自然に、競技や大会を通じて、自分を知り、他者を知り繋がっていく。人間は自分を開こうとか、

多様性を受け入れようと思っても、やっぱり怖さはあるものです。ダイバーシティカップなどで、ブラジルの人が隣
にいたらふつうに話してるかもしれないけど、「明日から、ブラジルからの留学生が来ますので、仲良くしてくださいね」
とか言われると意識するし、できるかなって、構えちゃう。だから無意識レベルで仲間づくりするにはスポーツは良
いですね。汗をかきながら、体感的に、その人が脅威じゃないよって、慣れて受け入れてしまうし。

鈴木 第4部にてでてる日本ソーシャルフットボール協会とdaimonも大会を開いていますが、こちらは自分たちの
居場所という意味合いだけでなく社会との接点を作ろうとしています。参加者側からみれば、世の中に注目される
晴れ舞台があることで「あの舞台に立ちたい」という欲が湧いて日々頑張れる。野武士ジャパンのメンバーも大会
が近づくとメンバーの集まりがよくなり、コミュニケーションが活発になりますよね。でも世間の注目を集める意味
はそれだけではなく、究極的には社会全体を居心地のよい場所にしていくためなのです。多くの人が楽しく盛り上
がってれば、NPO や企業の協力を集めやすくなります。貧困とかホームレス問題についてよくわからないという人
たちも、「楽しそう!」とか「なんかやってるなあ」というだけで集まってくれます。スポーツの大会であることの意味は、
押し付けがましくない形でメッセージを伝えられることかもしれません。そうやって自然と「そういうことだったの
ね」って理解してくれた人や団体と、大会の場を離れて新しい協働を生み出すことができる。そうやって輪を広げら
れると、社会全体が安心してチャレンジできる居場所に近づいていくと思うのです。

井上 実感のある話ですね。私自身、ダイバーシティカップという大会があったから、ホームレスの人たちと、頭
で何話そうとか考える前に、ふつうに彼らと出会ってボールのやりとりして、試合終わっておしゃべりしている。より
よい社会をつくるとか、イノベーションを起こすとか議論するよりずっとシンプルに、それぞれの多様さをボールを
蹴りながら自然に知って受け入れあっていく。体を思いきり動かし、気持ちよく、いろんな人がいるって互いに知って、
なんだか世界は美しいなあって、心も開いていく。これからの社会や世の中を、どうあり方や作法で作っていく
といいのか。その大事なヒントがあるように思います。

鈴木 スポーツが勝ち負けを競うゲームだということも、うまく生かしたいですね。勝つことを目指してみんな
頑張る。チャレンジがあるから試行錯誤もするし、その先の達成感もある。でもみんなが居心地のよい社会を目指
すなら、自分だけではたどり着けません。サッカーでは上手い人だけで強いチームを作ることもできます。でも、社
会全体のメンバーは選べません。だから、つまずくメンバーがいたらお互いに支えあって、みんなと一緒にゴールに
たどり着こうとするのが本来あるべき社会のはずです。その過程でそれぞれの個性の活かし方に気づき、少しずつ
やり方を工夫する。最初に想定したゴールではどうしても辿り着けないとわかれば、ゴールの場所も変えればいい。
みんなで辿り着けるゴールってどこだろうって、考え続けるのが大事だと思うんです。スポーツを通じて、そんな社
会のありかたを考えていけたらと思います。

●鈴木直文(一橋大学大学院准教授)

東京大学大学院工学研究科助教を経て現職。グラスゴー大学大学院社会科学研究所博士課程修了。主な研究
領域は「スポーツと開発」「社会的排除・包摂論」「都市/地域再生」。学部・大学院のゼミではスポーツ・余暇・
文化活動が生み出す充実感を、どのようにして包摂的な社会をつくることに繋げられるのかをテーマにゼミ生と
の探求を続ける。

●井上英之(慶応義塾大学大学院 政策・メディア研究科特別招聘准教授/NPO法人ビッグイシュー基金理事)

2002年日本初のソーシャルベンチャー向けビジネスコンテスト「STYLE」を開催。ソーシャルベンチャー・パー
トナーズ(SVP)東京を設立し、社会的な課題の解決に取り組む革新的な事業に対する資金提供と、パートナー
による経営支援に取り組む。世界経済フォーラムYoung Global Leader2009選出。近年は、マインドフルネス
とソーシャルイノベーションを組み合わせたリーダーシップ開発に取り組む。

おわりに

スポーツで仲間はずれを生み出さない社会をつくる

このガイドブックは、様々な事情で「普通の社会」から取り残されてしまった人たちを、スポーツの力で再び社会に接続しようとする取り組みを集めたものです。

学校に通って、仕事をして、住むところがあって、頼れる家族や友人がいて、余暇の時間には自分の好きなことをして楽しむ。多くの人はそんな生き方を「普通」だと思っているのではないかと思います。このガイドブックに登場する団体が支援している対象は、ちょっとしたことでそんな社会のあたりまえから外れてしまった人たちです。

でも彼らが経験してきたことの断片はきっと、思うよりずっと普通のことばかりなのではないでしょうか。家族との関係がうまくいかないとか、うつ病や依存症のような心の病とか、不景気で職を失ってしまうとか、学校にうまく馴染めないとか、そういうことは誰にでも起きうることです。たまたまそうした普通の出来事が折り重なってしまうと、なかなか抜け出せない貧しさのなかに閉じ込められてしまう。こういう現象を“社会的排除”といいます。いわば社会から「仲間はずれ」にされた状態です。

そんな人たちが社会への「仲間入り」ができる仕組み、あるいはそもそも「仲間はずれ」を生み出さない仕組みを、スポーツを通じてつくること。それがこのガイドブックのテーマです。そういう仕組みをつくることを、“社会的包摂”といいます。

社会的包摂の第一歩は、仲間はずれになっている人や、なりそうな人を見つけ出すことです。その次に、その人たちがどうして仲間はずれになりやすいのかを理解することが必要です。でもそれを理解するには、時間がかかります。例えば、失業してホームレスになってしまったことを、本人の自己責任と決めつけてしまうのは簡単です。それが本当なら、もっと努力して仕事を探しなさい、ということになります。でもその人の置かれた状況をよくよく理解してみれば、実はその人の責任ではどうしようもない事情を抱えていることの方が多いのです。本当はその人の個性をうまく生かせない社会の方に、責任があるのかもしれないのです。そうであれば、社会の方をどう変えていけばよいのかを考えなければならない。

仲間はずれになった人が仲間に出会い、その人の置かれた状況を周囲が理解し、自分らしくいられる機会を創出し、広い世界に挑戦する勇気を育て、そしてその人をずっと仲間として受け入れ続ける。スポーツは、そんな場をつくることに役立ちます。この報告書には、スポーツをどのように活かせばそれができるのか、たくさんの工夫が詰まっています。個人個人の心身の健康から始めて、社会全体の構造を仲間はずれの出にくいものにしていくところまで、大小さまざまな役割をスポーツが担うことがわかるでしょう。

考えてみれば、社会から仲間はずれになるというのは、おかしな言い方です。人が複数集まれば社会になるし、社会がなければ人は生きられない。他人と共に生きるのが人間です。社会の一員になるために、資格がいるのでしょうか。自分らしく生きるために、普通に学校に通い、仕事をするのが必須なのでしょうか。ここに紹介する団体の皆さんは、そうではないと信じています。スポーツで自分らしさを表現することを後押しすることで、あなたはいまのあなたのままで立派に社会の一員なんだよ、と伝える。それが彼らの実践に通底するアプローチです。社会に仲間はずれはいない。誰だって自分らしく生きられる。そんな社会をみんなが構想するとき、その社会はもうそこに実現しているのかもしれない。

(鈴木直文)

スポーツ

社会をあそぶガイドブック ～サッカーがつくる居心地の良い社会～

2018年3月30日

発行：特定非営利活動法人ビッグイシュー基金

デザイン：くとうてん

表紙・イラスト：保井力

事務局：長谷川知広 小林由希 橋新功一

中原加晴 永井悠大 保井力 池田真理子 高野太一 栗原奈津子 川上翔 林直美

編集・執筆：鈴木直文（一橋大学大学院 准教授）

調査・執筆：逢坂仁葵 栗栖由喜 千葉佳奈子 大森亮平

ダイバーシティサッカーアソシエーション準備委員会

（蛭間芳樹、青木弘達、井上英之、鈴木直文、日比野克彦、星野智幸、油井和徳）

(連絡先) 特定非営利活動法人ビッグイシュー基金

〒162-0065 東京都新宿区住吉町 8-5 シンカイビル 201号室

TEL: 03-6380-5088 FAX: 03-6802-6074

HP://www.bigissue.or.jp MAIL: tokyo@bigissue.or.jp

平成 29 年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業